

## 田遊びと修正会が出会う場（中）

—天野社と高野山周辺地域の修正会と御田—

脊 古 真 哉

（承前）

前稿「田遊びと修正会が出会う場（上）—高野山周辺地域の修正会系行事の成立と分布についての予備的考察—」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』37 2018年）を承けて、高野山周辺地域で実施されてきた御田（田遊び）を取り上げたい。これらの御田を天野社（丹生都比売神社、和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野）の行事が貴志川流域と有田川流域の周辺地域の集落へ伝播し、各伝承地での変容を経て定着していったものという視点から取り上げる。

### 7 仏堂と修正会の稠密な分布

前稿で述べたように畿内とその周辺には、中世以来ひろく稠密に修正会の分布が見られた。高野山周辺地域も同様で、各集落に所在する仏堂で修正会が実施されてきた。現在も山間部を中心に多くの仏堂が伝存している。この地域の仏堂は3間×3間のものが一般的で、一部に5間×5間の大型のものも見られる。屋根はトタン葺きや瓦葺きの宝形造となっているものが多いが、茅葺きに復元されているものでは短い棟のある寄棟造の屋根となっている。各集落（近世村）の中心的な宗教施設としての仏堂だけでなく、さらに近世村の下部の単位にも仏堂が存在することがある。これらの仏堂には近世・近代を通じて葬祭寺院化していったものも見られるし、近代以降に仏堂の敷地が学校などの公共用地に転用されたものも少なくない。

和歌山県北部の集落には、仏堂での修正会に際して摺られ配布された牛王宝印の版木を伝えている例が少なくない<sup>(1)</sup>。中には戦国期の年紀をもつ版木もあり、この地域の集落の修正会に近世以前から伝承されてきたもののあることを示している。有田川の上・中流域の旧花園村（現伊都郡かつらぎ町）と旧清水町（現有田郡有田川町）の各集落では、近現代まで修正会に付随するものとして仏堂での御田が伝承されてきていた事例が計9箇所知られている。旧花園村は中世の高野山領花園庄に含まれ、近世にも引き続き高野山領であった。旧清水町は一部を除いて中世の高野山領阿豆川庄<sup>あてがわ</sup>に含まれたが、近世には高野山領ではなく和歌

山藩領であった。

旧清水町の各集落では近世村よりも小さな単位にも仏堂が所在し、近世村の宗教的中心となる仏堂だけでなく、この小さな単位でも修正会を含む仏堂の祭祀が実施されてきた重層的な状況が報告されている<sup>(2)</sup>。2018年まで阿弥陀堂での御田が実施されてきた有田川町杉野原に含まれる中村組の観音堂では修正会の流を汲む行事が実施されており、組で回り持ちの版木で牛王宝印が摺られ、行事終了後に各戸に配布されている<sup>(3)</sup>。修正会に付随するものとして御田が伝承されてきた旧清水町と旧花園村とその周辺ではオコナイ・会式・シュウシ・ケチンなどの呼称で修正会系行事が稠密に伝承されていた<sup>(4)</sup>。これら旧清水町と旧花園村を含む修正会系行事が稠密に伝承されてきた地域は、概ね中世の高野山領荘園の範囲と重なるものとなっている。

また、奈良県側の吉野郡野迫川村にも高野山・天野社の影響が想定できる仏堂での修正会系行事がオコナイとの呼称で伝承されてきている。このように周辺地域で稠密に伝承されていた修正会が、より規模の大きな行事としての修正会に御田が付随する形態の受容のための基盤となったものと考えられる。

この節では、この地域の御田の受容に際しての受け皿となった仏堂での修正会系行事についての興味深い事例として、有田川町<sup>あお</sup>栗生と同町中原のおも講と堂徒式、および野迫川村の北今西と弓手原のオコナイを取り上げておく。

#### i 栗生と中原のおも講・堂徒式

有田川町栗生は旧清水町の最下流に位置する集落であるが、高野山領の阿豆川庄には含まれていなかった。重要文化財に指定されている3間×3間の短い棟をもつ寄棟造の建物である薬師堂には応永34(1427)年の棟札および明和5(1768)年の修復棟札が伝わっている<sup>(5)</sup>。計10体の平安時代のものとされる仏像が安置されていたが<sup>(6)</sup>、現在では棟札とともに高台に建設された収蔵庫で保管されている。薬師堂は同所の吉祥寺(浄土宗)によって管理され、吉祥寺薬師堂と呼ばれているが、これは元来のことではなく、吉祥寺の管理となったのは近世中期の享保10(1725)年のことである<sup>(7)</sup>。

応永34年の棟札には「棟上奉造立東福寺」とあり、明和5年の修復棟札には「棟上光明山東福寺醫王院薬師堂」とあり、薬師堂は「東福寺」と称されていた。修復棟札には「吉祥寺住持三世問答代」とあり、明和5年の段階では吉祥寺の関与が窺えるが、ここに「三世」とあるように薬師堂(東福寺)は吉祥寺が創立される以前から存在していたことが明らかである。有田川流域では下流部から上流部への浄土宗の展開が見られ、この吉祥寺がもっとも上流に所在するものであり、これより上流部には浄土宗寺院は存在しない。

おも講・堂徒式は正月8日に実施されてきた修正会系行事をベースとするもので、現在でも旧暦正月8日に実施されている<sup>(8)</sup>。この際に吉祥寺の住職が導師を務めているが、第2次

世界大戦前までは後述する中原の善福寺（高野山真言宗）の住職が出仕していたという<sup>(9)</sup>。

おも講は集落の草分けの13軒の家の当主（現在では12軒、実見した際には9名の参加であった）が回り持ちの当屋で行う座の行事であったが、現在では薬師堂に近接する農協支店の2階で午前11時ころから実施されている。おも講の「おも」は母屋、おも達などのおも（主）の意であろう。中央に「薬師如来」とあり両脇に「観世音菩薩」「大日如来」と墨書された掛け軸と「岩倉大明神」と墨書された掛け軸の2幅を正面に掛け、住職を中心に簡単な勤行の後、参加者が高杯に盛ったご飯を1箸ずつ口にし、続いて会食となる。

掛け軸に記される「薬師如来」「観世音菩薩」「大日如来」は薬師堂に安置されてきたいずれも重要文化財に指定されている薬師如来坐像・聖観音立像・大日如来坐像のことであろう。「岩倉大明神」は薬師堂の所在する栗生の集落の有田川の対岸の四村川との合流地点に聳立する巨岩に由来するもので<sup>(10)</sup>、四村川を挟んで岩倉神社がある。後述する久野原の御田の会場となる岩倉神社はここから勧請されたものである。

午後1時より、薬師堂で堂徒式が実施される。堂徒式は栗生集落の数え年3歳の子供の村入りの儀式で、堂徒とは薬師堂の門徒という意味であろう。前述の明和5年の修復棟札には「堂座」の文言が見え、そこには現在のおも講の家々とほぼ一致する名字の人名が記されている<sup>(11)</sup>。前稿で述べたように、この地域の仏堂での行事に関わって宮座ではなく「堂座」との文言が史料に少なからず見られる。ここに言う堂徒式は神社の氏子入りのような薬師堂の門徒となるための行事とするのが適切である。

行事の内容は、造花などで飾られた堂内で吉祥寺住職による読経の後、内陣で親族（母親など）に抱かれた数え年3歳の幼児（男女）に住職から香水が授けられる<sup>(12)</sup>。続いて外陣の所定の位置に座したおも講のメンバーと住職に対する幼児の父もしくは祖父による供応が実施される。最初に配られる膳には葉付きの丸のままの大根・豆腐・大豆が盛られている。次に濁酒が注がれ、串柿、牛王杖？（棒の先に餅をくるんだ牛王宝印を挟んだもの）、4つに折りたたまれた牛王宝印<sup>(13)</sup>、薬師堂の札が順次配布される。この際の住職の着座は元来のことではない<sup>(14)</sup>。

行事を通覧すると、数え年3歳の幼児が集落の草分けのおも講のメンバーによってあらたに堂徒となる——村の構成員となることを承認される儀礼が修正会に付随して実施されていると見ることができる。

栗生に隣接する同町中原の阿弥陀堂でもほぼ同様の堂徒式が新暦の1月5日に実施されている<sup>(15)</sup>。中原は有田川に流入する支流四村川を少し遡った地に位置し、こちらは中世の阿豆川庄に含まれていた。以前は阿弥陀堂には天文10(1541)年の陽鑄銘のある鰐口が懸けられており、そこには「中原村善福寺」とある<sup>(16)</sup>。現在では同所の葬祭寺院である善福寺（高野山真言宗）が「善福寺」を称しているが、これは阿弥陀堂の寺号を冒したもののようである。3間×3間の宝形造の建物である阿弥陀堂には多く後世の修理の手が入っているが、建立年

代は鰐口の年紀のころと見て問題は無いという<sup>(17)</sup>。

行事の内容は前述の粟生と大同小異で、やはり数え年3歳の幼児（男女）の村入りの行事であるが、全般に簡略化されているとの印象を受けた。堂内の荘厳も粟生と比べると簡略で、内陣・内陣の2本の柱に葉の付いた竹を縛り付け、その竹に木製のツバメと刀のツクリモノを取り付けるだけである。ツバメと刀は1回限りではなく使い回しされている。善福寺住職による読経の後、住職により村入りの幼児の帳付けがなされる。続いて粟生と同様に外陣で供応が実施されるが、住職は着座しない。各人の前に置かれた膳には杉葉を敷いた煮豆だけが載せられ、順次各人に濁酒が注がれる。実見した際には給仕役を女性が務めており、給仕の様子も儀礼めいたところは見られなかった。また、牛王宝印を摺ることや配布も行われていない。

粟生と中原の堂徒式と同様の子供の村入りの儀礼は、前稿でも触れたように周辺地域にひろく見られたものである。後述する旧清水町久野原の岩倉神社の御田では、神社への渡御の行列に母親に抱きかかえられた生後1年未満の新生児が加わっている。これを「渡初め」と称しており、やはり幼児の村入りの儀礼となっている。また、杉野原の御田では、かつては数え年3歳の幼児が紙袋の中にいれた種粃を御田の「堂徒坊し粃持ってこい」のくぐりで仏前に供えたとの伝承があり<sup>(18)</sup>、やはり修正会系行事の中に仏堂の門徒を意味する「堂徒」の呼称で幼児の村入りの儀礼が組み込まれていた。

## ii 野迫川村のオコナイ

高野山東南麓の奥高野とも呼ばれる奈良県吉野郡野迫川村にも、ひろい意味での高野山および天野社の影響下で成立したと見られる修正会系行事（オコナイ）が見られる。野迫川村の領域は中世の所領関係ははっきりとせず、高野山と吉野山との間で紛争が見られたようである。近世には幕府領で高野山領ではなかった。また、和歌山県側の旧高野山領の地域と異なり、丹生明神が勧請されている例も見られない。オコナイ伝承集落である北今西や平には勝手神社があり、これは吉野山の勝手明神（明治以降には吉野山口神社とされる）が勧請されたものであろう。また、弓手原の春日神社（五社大明神）は春日社の4神と若宮が勧請されたものである。

野迫川村最奥部に位置する弓手原と北今西と平では仏堂を主な対象として行事が伝承されてきた<sup>(19)</sup>。これらの事例には田遊びは付随していないが、北今西では行事名を「御田」とも称しているし、弓手原では参観者・演者が菓子・小銭などを蒔くことを粃蒔きに擬えてもいる。これらの集落は熊野川（十津川）の支流川原樋川の源流部に所在し、和歌山県の旧花園村と紀和国境を挟んで対置する地である。

北今西のオコナイは同所の阿弥陀堂（寿楽院）を主な対象として正月4日、新暦の1月4日、1月3日を経て現在は1月2日に実施されている<sup>(20)</sup>。この阿弥陀堂は3間×3間の宝形

造の建物で、旧花園村や旧清水町など和歌山県側の集落の仏堂と同様の形態である。天正20（1592）年の棟札が伝存するという<sup>(21)</sup>。

北今西とその枝郷であった大股は、北今西に所在する葬祭寺院（廃絶）、村氏神（勝手神社）、仏堂（阿弥陀堂）を共通のものとし、オコナイも北今西・大股の両集落の住民によって実施されてきた。オコナイは年齢階梯的な組織で運営され、僧侶・神職などの専業の宗教者は関与しない。一年神主と巫女と宮役が集落内のさまざまな行事に際して中心的な役割を勤めるが、この神主は転入者も含めて村入りが認められた世帯主（男性）が、巫女は女性が順次務めることとなっており、開かれた組織と言える。

堂内の荘厳は各地の修正会系行事と共通する点が多く、旧花園村・旧清水町の事例とも関連が窺えるものとなっている。造花や掛け餅が見られ、モリモノと称する一対の供物もあるが、後述する花園村築瀬や清水町杉野原のモリモノとは異なり、穀物でエトや縁起物を描くものではなく、丸太の台の上の杉葉の芯に挿した串にミカンやイモを付けたものとなっている。これは奈良県内や和歌山県北部をはじめ、各地の供物・神饌に多く見られる形態と共通する。

また、阿弥陀堂の内陣を結界するようにジョウジキと呼ばれる白紙を切り絵のようにしたものが入り口、四天柱と貫、本尊の厨子に張られている。これは愛知・長野・静岡県地域霜月祭などの際に祭場を結界するザゼチと呼ばれる切り紙に類似する。同様の切り紙は全国各地のさまざまな行事に見られるが、直接的には高野山の壇上伽藍の堂舎や奥の院、山内寺院などで正月に仏堂・社殿などに掲げられる「宝来」の影響であろう。高野山では「宝来」は元来絹布に描かれたものであったという<sup>(22)</sup>。

北今西の事例で特徴的なのは、内陣の貫に懸けられるカズラと呼ばれるシラクチカズラを編み径2メートル弱の輪にし、櫛などで飾られたものである。以前は東西に2つのカズラが懸けられ、行事の中で丸太を突っ込んで掘り切るカズラキリが東西の競争で行われていたが、現在では参加人員の都合で1つのカズラだけを新製し、前年に調製したカズラを掘り切るようになっている。このような2組に分かれての競技が新春行事の中に見られることは全国的に少なくないが、和歌山県側も含めて周辺地域には見当たらない。

牛王宝印を摺ることと頒布も見られる。戸数分だけ用意された紙の両端を墨汁とベンガラで染めて折りたたんで世帯主の名を書いた牛王宝印が外陣の長押に挿され、行事終了後に頒布される。なお、仏堂は寿楽院と呼ばれているが、牛王宝印の印文は「牛玉／受楽院／寶印」となっている。また、牛王宝印の宝印の部分の印を長さ3メートルほどの木の柄に挟んで参会者の頭上にかざす「宝印カツギ」が行われるが、これは各地の修正会系行事に見られる宝印を額に押すなどの宝印の授与の変形である。行事名を御田とも称しているが、現状を見るかぎり、御田の名称から想起されるような田遊びを思わせるような要素はない。

弓手原のオコナイは隣接する北今西と共通する部分もあるが、異なる点も少なくない。弓

手原ではオコナイの対象となってきた仏堂（地蔵堂）と葬祭寺院の徳蔵寺（高野山真言宗）が小学校建設により敷地・建物を失い<sup>(23)</sup>、旧小学校敷地の西側に建てられた公民館が仏堂と徳蔵寺の機能を兼ねるものとされていることも理由の一端であろう。

近年では1月3日を中心に公民館を会場に一連の正月行事が実施されていたが、過疎化などの影響で2015年を最後に休止となっている<sup>(24)</sup>。以前は堂のオコナイと寺のオコナイが時刻を変えて重ねて行われたが、近年では寺のオコナイは省略されていたという。オコナイの翌日の4日午前にはオハンニヤサマという大般若経の転読が同じく公民館を会場に行われていた。かつては5日の行事であったという。一連の正月行事に際しては高野山から僧侶が招かれ導師を務めていたが、かつては1年交代の本神主が導師役を務めたという<sup>(25)</sup>。

現在の公民館の建物は一段高くなった舞台状の上段の奥の普段はアコーディオンカーテンで閉ざされる位置に祭壇が設けられ、堂のオコナイの際には集落内の春日神社の本地仏の5幅の掛け軸が懸けられた。堂オコナイの荘厳には、掛け餅（カケノモチ）、造花・ケズリカケなどが見られ、各地の修正会の荘厳と共通するものとなっていた。堂オコナイの際には祭壇の前にキヌと称する「壽」の文字をあしらった切り紙が1枚貼られる。これは北今西のジョウジキとも相通じるものであるが、弓手原の場合は高野山から齋されるという。このキヌは春日神社の本殿や各戸の入り口などにも張られる。キヌとの呼称は高野山の宝来がかつては絹布に描かれたものであったことによるのであろうか。牛王宝印が摺られ、各戸に配布される。版木（ゴーバン）には「徳蔵寺」とあり、裏面に享禄4（1531）年の陰刻銘がある<sup>(26)</sup>。

やはりモリモノ（モリノモノ）と称する供物があり、北今西とは異なり、築瀬・杉野原と共通する形態となっていた。近年ではモリモノは凸面状の台にカラーコピーされた横長のエトの図柄を張り、周囲を色紙で飾り、さらに図柄の上にスズタケに付けた3輪の造花をあしらったもの2つとなっていたが、かつては築瀬や杉野原と同様に染められた五穀でエトなどの図柄を描いたものであったという<sup>(27)</sup>。5幅の掛け軸に対応する5つの三宝に盛られた供物はカラモリと呼ばれている。カラモリの呼称は前述の杉野原中村組の修正会など周辺各地に見られる。

北今西と同様に年齢階梯的な組織で行事が実施されていた。一連の行事に含まれる内容は盛りだくさんで、神楽のように周辺の修正会系行事には見られないものもある。和歌山県側の御田との関係で興味深いものを取り上げておこう。

堂のオコナイで地元の参観者（女性・子供が中心）が入堂した際に菓子・小銭などを堂内に蒔くこと、続いてオコナイの中心となる若連中が入堂する際に菓子・小銭を蒔くことを「粃蒔き」と称している。さらにかつてはオコナイが始まるとヨナコ（若連中になる前の少年）が主に女性の背中を押したという。これを「苗押し」「姉押し」と称し、豊穣のための呪術としていた。これらはオコナイを農耕——水田稲作の予祝儀礼とする認識があることを示すものと思われるが、組織的な御田（田遊び）といったものではない。オコナイの終了後に下



着姿（元来は下帯姿であろうか）の若連中が締め太鼓にあわせてチョンヤ・チョンヤと声をかけながらおしくらまんじゅうのようなことをする。これを「鬼踊り」といっているが、修正会に登場する鬼の名残であるか否かは何とも言えない。後述するように旧花園村中南の御田の終了後にも似通う「をにをどり」が実施されていた。

弓手原は物資の輸送などで和歌山県側との関係が深く、正月18日の旧花園村北寺の御田に際して弓手原の住民による峠を越えての「北寺参り」が実施されていたという<sup>(28)</sup>。北寺側でも野迫川村の住民の御田に際しての参詣は伝承されている<sup>(29)</sup>。野迫川村最奥部の弓手原・北今西・平の3集落には和歌山県側の高野山周辺地域との関係が想定できる仏堂での新春行事が伝承されてきた。これらの行事は北寺をはじめとする旧花園村の集落との交流のなかで伝播・定着したものであった可能性があらう。

## 8 天野社の修正会と御田一周辺地域への行事の発信地として―

和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野に所在する天野社（天野大社・丹生都比売神社）は、高野山麓の隠れ里のような天野の地に所在し、長く高野山と深い関係を持ってきた。明治初年までは、多数の社僧が在住し、また、行事に際しては高野山からの僧侶の下向もあり、神仏習合の状況を呈していたが、神仏分離以降、仏教的な構造物は撤去され、天野社の山王堂（山王院）の修正会と同日に実施される行事であった御田祭も神社神道的に改変されている。

現在の丹生都比売神社には、玉垣内に4棟の本殿（一間社春日造）と小振りの若宮（流造）の社殿があり、本殿の第1殿には丹生都比売大神（丹生明神）、第2殿には高野御子大神（高野明神）、第3殿には大食都比売大神（気比明神）、第4殿には市杵嶋比売大神（巖島明神）が祀られている。『延喜式』神名下の南海道紀伊国伊都郡の条に「丹生都比女神社<名神大月次新嘗>」とあるのが現在の丹生都比売神社のことである。10世紀の『延喜式』の段階で中央の神祇官に認知されていた祭神は丹生都比売（女）神1座だけであった。

天野社（丹生明神）と高野山との関係の発端については、空海（774～835年）の高野山開創際して、丹生明神（もしくは丹生明神と高野明神）が空海に高野山の土地を譲り、空海は高野山の守護神として、高野山壇上伽藍（壇場伽藍）に丹生明神と高野明神の社（御社）を祀ったとされている。さらに後には、犬を連れた狩人である狩場明神が、空海を高野山に導いたとされ、この狩場明神と高野明神が同一視されるようになった。いずれも空海の死後かなり時間が経った10世紀以降の史料に記されるものである。高野山と丹生明神の結び付きは空海在世中のことではなく、空海の死後ある程度の時間が経過して後のことと見るのが適切である<sup>(30)</sup>。

天野の御田は、中世後期以来、天野社の祭神を仏体として祀る山王堂の修正会と同日の正月14日に実施されていたことが確認できる。前述のように山王堂・多宝塔・御影堂などの仏

教的な構築物は明治初年に取りはらわれた。文明8(1476)年の年紀をもつ『金剛峯寺山王院長床山上山下雑記』や前欠のため年次不明の『金剛峯寺年中行事』、近世前期のものと見られる『天野雑記』に拠ると前近代の修正会と御田は天野在住の社僧・社人、行事に際して高野山から下向する僧侶などによって実施されていたことが窺える<sup>(31)</sup>。

『天野雑記』では昼間に御田があり、その日の夜に修正会が実施されていたとなっている。これは現在各地で見られる修正会に付随する田遊びあり方とは異なる。中世・近世の天野社では、かならずしも一体の行事として修正会と御田が行われていたわけではなさそうである。『天野雑記』の「天野下向之覺」には「正月十四日、御田神前、學侶一向不出合」とあり、「御田之支度之事」の条には「神前御供、調之時、社家ヨリ御出仕アレト告來ル時ニ、伴僧召連出仕ス、經一卷了ノ時、社人御田之祝儀アリ」とあって、社家の慇懃によって山上から下向した学侶ではなく天野在住の長床衆などの僧侶が神前に出仕している。これは神仏習合の施設である中世の天野社で僧侶が実施する修正会と社家主導の御田が出会った状況を示すものなのであろう。

現状では見られないが、修正会に鬼が登場したことも史料的に確認できる。『金剛峯寺山王院長床山上山下雑記』に「修正スキメヲニノタイマツ」とあり<sup>(32)</sup>、修正会の法会の後に鬼が登場したように読み取れる。これは歴史的にも、現在の各地の行事でも普通に見られる形態である。なお「メヲニ」を「毒鬼」とする写本もあり<sup>(33)</sup>、「メヲニ」は妻鬼の意かとも思われるが、いずれにせよ「メヲニ」「毒鬼」の意味はよく判らない。

『天野雑記』の「念佛會米之拂方」に「一壺石 兩年預、正月十四日御田之料／一五斗 鬼之餅之料、年預渡」とある<sup>(34)</sup>。「鬼之餅之料」は鬼役を務めた者に与えられる餅の材料なのであろう。また、同じく『天野雑記』の「御田之支度之事」の条に「夜入、人足貳人鬼ナシテ山王院籠」とあり、鬼役は2名であった<sup>(35)</sup>。東京国立博物館現蔵となっている天野社に伝来した鬼面2面があり<sup>(36)</sup>、この鬼面が修正会で使用されたものと判断できる。

現在では1月第3日曜日に実施されている天野社の御田祭の次第は、①田の神祭、②畔はつり、③牛呼び、④五月女呼び、⑤早乙女誉め、⑥連れ御田、⑦種蒔き、⑧鳥追い、⑨田都女呼び、⑩田渡り御田、⑪苗供、⑫れいの坊呼び、⑬稻刈り、⑭稻供となっている(表1)<sup>(37)</sup>。現行の次第は、明治35(1902)年の年紀をもつ『御田手引草』にもとづいて実施されており、前近代の状況とは少なからず変化が見られるようである。現在では樓門(中門)内が祭場となっているが、近世には本殿の第1殿・第2殿の前の透塀と透廊(樓門の右に続く建物)との間に置かれた湯釜の辺りで行われていたという<sup>(38)</sup>。

神職による神道祭式に続いて、御田は田人と牛飼の2人を主な演者として掛けあいの形式で実施される。田人は白尉面、牛飼は黒尉面を着し、田人は鍬、牛飼は鋤を使う。他の演者として牛頭を被る牛役2人、巫女装束の早乙女役4人(少女)<sup>(39)</sup>、⑨田都女呼びと⑫れいの坊呼びに登場する女装の「田都女」と「れいの坊」(同一人が演じるが、着用する衣装と面



表1 丹生都比売神社の御田祭（現在の行事）

	現 状	摘 要
神 社	丹生都比売神社	前近代には天野社・丹生四社明神。
所在地	伊都郡かつらぎ町上天野	近世には伊都郡上天野村。
期 日	1月第3日曜日	前近代には正月14日、近代以降、旧暦の正月14日を経て現行期日。
祭 場	樓門内	近世には本殿前の透塀と透櫓との間に置かれた湯釜の辺り。
担い手	天野の御田祭保存会	前近代には社家・八乙女代。
神 事	神道祭式	神職執行、浦安の舞（早乙女役）。
演 目	1 田の神祭	田人1名・牛飼1名。
	2 畔はつり	田人1名・牛飼1名。
	3 牛呼び	田人1名・牛飼1名・牛2名。
	4 早乙女呼び	田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
	5 早乙女誉め	田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
	6 連れ御田	田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
	7 種蒔き	田人1名、牛飼・早乙女は脇に控える。
	8 鳥追い	牛飼1名、田人・早乙女は脇に控える。
	9 田都女呼び	田人1名・牛飼1名・早乙女4名・田都女1名。
	10 田渡り御田	田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
	11 苗供	田人1名・牛飼1名、早乙女は脇に控える。
	12 れいの坊呼び	田人1名・牛飼1名・早乙女4名・れいの坊1名。
	13 稲刈り	田人1名・牛飼1名、早乙女は脇に控える。
	14 稲供	田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
神 事	神道祭式	神職執行。田人1名・牛飼1名・早乙女4名。
*2013年1月20日・2020年1月19日調査		

が異なる）の1人がある<sup>(40)</sup>。早乙女役以外は男性が演じる。牛は登場するが、模造の馬鉤や唐犁を用いることは今回取り上げる周辺地域の例を含めて無い。

早乙女が登場し、松葉を束ねた苗も用意されているが、不思議なことに田植えの所作は演じられない。いつか欠落してしまったのであろう。地方顕密寺院や集落の堂・社などの宗教施設での田遊びでは早乙女役も含めて男性が演じるのが一般的である。天野社の御田では巫女装束の少女が早乙女役を務めている。今回取り上げる周辺地域の他の事例では女装の少年が演じるものとなっている<sup>(41)</sup>。

前稿で触れた春日大社（奈良県奈良市）の御田の例など中世以来存在の確認できる大規模な神社での田遊びでは、早乙女役は巫女などの女性が務めるのが一般的なあり方である。これに対して各地の顕密寺院や集落の仏堂や神社での田遊びでは女装の少年の役となっている。天野社には平安時代後期以来、歌舞を勤める「八女」「八乙女」がいたことが確認でき<sup>(42)</sup>、この「八女」「八乙女」が御田の早乙女役を務めるようになったのであろう。周辺地域の事例の場合、天野社の行事から集落の仏堂の行事への伝播・定着の過程で、早乙女役の女性から男児への変化が起こったものと見られる。

最後は⑬稲刈り、神に稲穂を供える⑭稲供となっている。全国的に見れば田植えまでで終わる田遊びの事例が多い。収穫、さらに初穂を神仏に供える場面までが演じられるのは天野社をはじめとする高野山周辺地域の御田の特色の1つとできる。

現在の天野社の御田は、神仏分離の影響のため、祭場のきらびやかな荘厳は無く、鬼が登場することも無く、修正会などの仏教行事の面影はまったく感じられない。御田の当日に天野社から参詣者に摺り物の「生土宝印」が授与されているが、これは修正会の牛王宝印の名残であろう。また、田人と牛飼が入退場時に杖を突くが、これも牛王杖の名残であろうか。

次節で見てゆくように、旧花園村・旧清水町の有田川上・中流地域、旧海草郡美里町（現紀美野町）の真国川・貴志川流域に天野の御田と共通する内容を含み直接的・間接的に関係すると見られる事例が伝えられている。これらは中世後期には高野山領の荘園であった地域であり、天野社に近接する地域で、多くの場合、丹生明神が勧請されている。また、高野山上では原則として歌舞音曲を伴う法会は修正会も含めて停止されていたということもあり<sup>(43)</sup>、この地域の御田の発信地として天野社を想定することができる。

なお、天野社に程近い下天野の八幡神社でも御田が実施されたことがあったという。八幡神社の御田は近代に天野社の御田が毎年行われなくなった時期に、奈良県方面の御田を参考にして行われるようになったものという<sup>(44)</sup>。これは本稿で取り上げる高野山周辺地域の御田とは同列には扱えないものである。

## 9 周辺地域の事例—貴志川・有田川流域—

この節では、高野山周辺地域の御田について現行および近年まで実施されていた事例を中心に概観しておく。この地域の御田は修正会に付随するものとして伝承されてきた。前稿で述べたように、修正会に田遊びが付随することは、かならずしも一般的な現象とはできない。今回取り上げている地域は、東海地方以外では例外的に修正会に付随する田遊びが数多く伝承されてきた地域なのである。

これまでの研究や<sup>(45)</sup>、筆者の調査によると、天野社の御田が伝播したと考えられる事例は、有田川流域と紀ノ川の支流である貴志川流域の山間部に分布している。高野山周辺地域でも、現状では紀ノ川本流に沿った平野部の集落には御田は見られない。『紀伊続風土記』には紀ノ川南岸の現かつらぎ町東洪田の蟻通神社で「御田植」が実施されていたことが記されているが<sup>(46)</sup>、これは天野社から至近の地でもある。このような御田の分布は、この地域の御田がやはり高野山ではなく天野社の行事の影響下に成立したことを示すものと見られる。

これら貴志川・有田川流域の修正会と結び付いて伝播・伝承されてきたと見られる御田の事例を、御田の実施が確認できないものも含めて、まとめて取り上げるのが適切と考えられるものを表2に掲げておく。この表に掲げた以外にも廃絶例はあるものと考えている。なお、

表2 高野山周辺地域の御田関連行事

寺社堂名	現行／廃絶	所在地	主な行事名	期 日	旧期日	備考
1 丹生都比売神社	現 行	伊都郡かつらぎ町上天野	御田祭	1月第3日曜日	正月14日	近世には山王堂の修正会と同日に実施
2 大隆寺(廃)	廃 絶	伊都郡かつらぎ町志賀	鬼はしり	—	正月10日	『紀伊統風土記』巻之47
3 観音堂	廃 絶	伊都郡高野町花坂	御田の舞	—	正月7日	『高野町史』民俗編
4 蟻通神社	廃 絶	伊都郡かつらぎ町東浜田	御田植	—	正月11日	『紀伊統風土記』巻之47
5 観音堂?	廃 絶	海草郡紀美野町長谷宮	御田	—	正月4日	長谷丹生神社文書
6 真国丹生神社	現 行	海草郡紀美野町真国宮	御田春鍬規式	旧正月7日	正月7日	神社隣接地に観音堂
7 薬師堂		伊都郡高野町湯川	修正会			
8 観音堂		伊都郡高野町相浦	修正会		正月4日	
9 観音堂	廃 絶	伊都郡かつらぎ町花園久木	オコナイ	—	正月4日	『花園村のあゆみ』
10 地蔵堂	廃 絶	伊都郡かつらぎ町花園中南	オコナイ 御田	— (1990年代廃絶) — (1935年廃絶)	正月4日 正月10日	正月10日の御田は1935年以降中止
11 観音堂	廃 絶	伊都郡かつらぎ町花園新子	御田	—	正月9日	詳細不明
12 観音堂(帝釈寺)	廃絶(御田)	伊都郡かつらぎ町花園北寺	オコナイ 御田	1月初旬 — (1961年廃絶)	正月6日 正月18日	会場は神社境内仏堂から観音堂へと移動?
13 大日堂	現 行	伊都郡かつらぎ町花園梁瀬	御田	2月16日前後の日曜日 (西暦奇数年隔年開催)	正月6日 正月8日	大日堂(現遍照寺境内)はかつては下花園神社境内に所在
14 大日堂	1953年廃絶	有田郡有田川町押手	御田	—	正月9日	神社境内の大日堂は洪水で流失
15 阿弥陀堂	2018年廃絶	有田郡有田川町杉野原	御田	2月11日(西暦偶数年)	正月6日	2018年を最後に中止
16 阿弥陀堂	1908年廃絶	有田郡有田川町板尾	御田	—	正月5日	阿弥陀堂は焼失
17 宝亀寺?	近世未廃絶	有田郡有田川町井谷	御田	—	不 明	詳細不明
18 岩倉神社	2019年廃絶	有田郡有田川町久野原	御田	2月11日(西暦奇数年)	正月9日	近世には仏堂で御田を実施 2019年を最後に中止
19 阿弥陀堂	現 行	吉野郡野迫川村北今西	オコナイ	1月2日	正月4日	
20 公民館	2015年廃絶	吉野郡野迫川村弓手原	オコナイ	—	正月3日	公民館は妻絶した地蔵堂と徳蔵寺(高野山真言宗)を兼ねる。
21 地蔵堂(平等寺)	現 行	吉野郡野迫川村平	オコナイ	1月2日	正月5日	弓射儀礼

\*7の湯川、8の相浦は近世までは花園庄に含まれていた。

貴志川・有田川流域からは外れるが、和歌山県日高郡旧美山村（現日高川町）串本にも高野山周辺地域の御田と関連する事例が伝承されていたようである<sup>(47)</sup>。この事例は有田川流域からの2次的な伝播と捉えるのが適切なものであろう。

### i 真国宮の御田

最初に和歌山県海草郡紀美野町（旧美里町）真国宮の真国丹生神社の御田春鋤規式について触れておこう。今回取り上げる他の事例が有田川の上・中流域に所在する集落の行事であるのに対して、この真国宮は貴志川の支流の真国川流域に位置する。しかし、貴志川上流部の同町長谷宮でも近世の史料で御田の実施が確認でき<sup>(48)</sup>、さらに上流に位置する高野町花坂の観音堂でも「御田の舞」の行事が行われていたという<sup>(49)</sup>。なにより天野社自体が真国川の源流部に所在する。有田川流域だけでなく、貴志川流域にも天野社からの行事の伝播が見られたのである。

真国宮の含まれる真国地区は、中世には神野・真国庄に含まれ、神護寺領であったが、承久の乱（1221年）の後に高野山領となった。近世には真国川流域の北野・初生谷・花野原・蓑津呂・宮・蓑垣内・井堰の7箇村が真国郷を構成し、引き続き高野山領であった。真国宮の地名は一郷の鎮守とされた丹生明神が所在することによる<sup>(50)</sup>。

真国宮の行事は近世には正月7日に実施されていたが、数10年前に廃絶し<sup>(51)</sup>、何度かの復活の試みを経て、近年、同所の廃校となった小学校跡に設立されたり創造芸術高等学校の生徒を主な担い手として復興されている<sup>(52)</sup>。復興後は新暦の1月7日に実施されていたが、現在では旧暦の正月7日を期日とするようになっている<sup>(53)</sup>。詞章は戦前に記録されたものが残っており、現状でもほぼ同じものを用いているが、衣装や所作は戦前の写真などと比べると相当大きな変化が見られるようである<sup>(54)</sup>。現在の行事は参考の域を出ないものとせざるを得ない。

真国丹生神社の拝殿で神職による神道祭式に続いて御田が実施される。演目は①見参、②鋤初め、③牛使い、④畔はつり、⑤肥入れ、⑥苗代ならし、⑦水口祭り、⑧種蒔き、⑨苗見、⑩舅婿の見参、⑪苗取り、⑫田植え、⑬稲刈り、⑭蔵入れ、となっている（表3）。実見した際には舅と婿の2人を主な演者とし、他に牛役1人、早乙女役3名。楽を担当する者3名で実施されていた。いずれも前記の高校の生徒が担当していた。土俗的な白色の面を着した舅と茶色の面の婿は、それぞれ「花賀の丞」と「福太郎」と称されている。この「花賀の丞」と「福太郎」については、他の地域の類例も含めて次稿で取り上げる。

⑦水口祭りの場面では婿の「福太郎」が1人で拝殿の西北隅に白米を入れたミニチュアの三宝3つと小さな案1つを置く。これらは行事の最後までそのままとなっている。③肥入れは、下肥を入れた肥桶を担い柄杓で肥を撒く演出となっている。しかしながら周辺の御田の事例、また他の地域の田遊びの事例から見て、肥は下肥ではなく、草を水田に踏み込むとい

表3 真国宮の御田春鋤規式（現在の行事）

	現 状	摘 要
神 社	真国丹生神社	近接して観音堂・大日堂。
所在地	海草郡紀美野町真国宮	中世・近世は高野山領真国庄。近世の真国郷7箇村の行事であった。
期 日	旧正月7日	近世には正月7日。復興後1月7日から旧正月7日に変更。
祭 場	拝殿	
担い手	りら創造芸術高等学校生徒	祭場の設営などは地元住民が実施し、芸能の部分を前記高校生が担当。
神 事	神道祭式	拝殿で神職執行。関係者・観覧者参加。
演 目	1 見参	花賀の丞・福太郎。
	2 鋤初	花賀の丞・福太郎。
	3 牛使い	花賀の丞・福太郎・牛1名。
	4 畔はつり	花賀の丞。
	5 肥入れ	花賀の丞・福太郎。
	6 苗代ならし	花賀の丞・福太郎。
	7 水口祭	花賀の丞・福太郎。
	8 種蒔き	花賀の丞・福太郎。
	9 苗見	花賀の丞・福太郎。
	10 舅・婿見参	花賀の丞・福太郎。
	11 苗取り	花賀の丞・福太郎・太鼓1名・スリササラ2名。
	12 田植え	花賀の丞・福太郎・太鼓1名・スリササラ2名・早乙女3名。
	13 稲刈り	花賀の丞・福太郎・太鼓1名・スリササラ2名・早乙女3名。
	14 蔵入れ	花賀の丞・福太郎・太鼓1名・スリササラ2名。
*2017年2月2日調査		

う所作が演じられるのが一般的である。ところが戦前の台本に「糞持候が」「糞三荷持たうば」といった文言があり<sup>(55)</sup>、当時から現在のような演出だったものと見られる。これは伝承の間に肥の意を取り違えてしまったのであろう。また、②牛使いに登場する牛は、牛頭をかぶり着ぐるみのような衣装を着けているが、このような衣装も周辺の事例では見られない<sup>(56)</sup>。

現在の行事では、⑬稲刈りは⑫田植えと同様に早乙女役が演じている。これは異例とも言えるものである。後述する久野原の御田でもやはり早乙女役が稲刈りを演じるが、真国宮の場合、戦前の台本を見るかぎり、稲刈りは「花賀の丞」と「福太郎」が演じていたように読み取れる。やはり現状は近年における変容であろう。

楽は太鼓役1名とスリササラ役2名が担当する。この3名は⑪苗取りの場面で呼び込まれて登場する。太鼓は周辺と他の事例とは異なり締め太鼓ではなく、小振りの木製の胴に鉦を打った太鼓である。楽の3名は最後の献供の場面である⑭蔵入れまで楽を務める。

現在では神社行事の祈年祭と位置づけられており、修正会に付随する御田との面影は全く見られない。しかし、詞章の内容などからして、この御田もやはり仏堂の修正会に付随するものであったと考えられる。本稿で取り上げる有田川流域の事例と同様に高野山・天野社の



文化圏に伝承されてきた修正会系行事の1例と位置付けられるものである。神社と小さな谷を挟んですぐ東に観音堂が、少し離れて西に大日堂が現存するが、これらの仏堂と行事との関係は詳らかでない。

なお、この真国宮の御田について大阪府堺市の住吉神社から伝えられたとの言説があるが<sup>(57)</sup>、次第書や行事の内容などから見て、天野社を発信地とする高野山周辺地域の御田の一環として捉えるのが適切なものである。

## ii 旧花園村の御田

高野山奥の院から流れ出す有田川（御殿川）に沿った山間の地である和歌山県伊都郡かつらぎ町花園（旧花園村）は高野山の膝下の地と言ってよく、上述のように中世には高野山領花園庄であり、近世末にいたるまで高野山領であった。旧花園村の各集落（近世村）には仏堂が所在し<sup>(58)</sup>、それぞれの仏堂で修正会（オコナイ）が実施され、修正会に付随して御田が行われていた事例がある。史料のおよび伝承的に実施が確認される御田として中南・新子・北寺および現行の梁瀬の各集落（近世村）の例がある。

旧花園村では過疎化、特に1953年の有田川大水害により壊滅的な被害を受けて、状況は一変してしまった。多くの集落で民家や会場となる仏堂・神社の流出・倒壊があり、行事の廃絶した集落が多い。現在では、旧花園村梁瀬の遍照寺境内に所在する大日堂の修正会と御田だけが存続している。大日堂（大御堂）は有田川を挟んで対岸の下花園神社の境内（現在では学校用地となっている）に所在したが<sup>(59)</sup>、1961年に解体され、遍照寺境内に移転・新築されたものである。

中南でも近年まで1月3日に修正会（オコナイ）が実施されており、昭和10(1935)年までは周辺の集落と同様に修正会と一連の行事として正月10日に御田が行われていたという<sup>(60)</sup>。中南の修正会と御田はかつて同所の上花園神社境内に所在した「大御堂」と称する仏堂で行われていたというが、焼失後に集落内の地藏堂での行事となり、この地藏堂の廃絶後には隣接する地藏寺（高野山真言宗）で実施されるようになったという<sup>(61)</sup>。地藏寺には修正会で摺られ各戸に配布された牛王宝印の版木が残されており、ここには「福王寺」とある<sup>(62)</sup>。これは「大御堂」の寺号であろう。

中南区有文書には、文明2(1470)年の年紀をもつ「修正会導師法則」、修正会で読まれた天文22(1553)年の年紀をもつ「千輪祭文」（牛頭天王祭文）、同じく修正会で読まれた神名帳（欠年）が伝えられている<sup>(63)</sup>。これらの史料から見て、中南の修正会が少なくとも中世後期に遡るものであることが窺える。また、同所の上花園神社には計23面の仮面群が伝来しており、この中には赤鬼と青鬼の2面の鬼面も見られる<sup>(64)</sup>。これらの仮面はレンゾと呼ばれる行事で使用されたものと伝えられているが<sup>(65)</sup>、後述するように、天野社と同様に、かつての梁瀬や中南の修正会・御田に鬼の登場が見られたのではないか。また、白尉と黒尉の面もあり、

この2面は御田に使用されていた可能性がある。

昭和7(1932)年の御田の詞章の記録である『御田ノ歌ノ寫』には「おものぢやう」と田主の「徳太郎」は見えるが、主な演者の舅と婿について福太郎などの名は見えない<sup>(66)</sup>。後述する北寺の例などからすれば「おものぢやう」は舅のことであろうが、詞章からははっきりとしない。『御田ノ歌ノ寫』は詞章を記録したものであるので、これからだけでは演者については不明の点が多い。配役は「常仕」2名、「太鼓打ち」1名、「太鼓持ち」1名、「唄いばやし」1名、「舅」1名、「婿」1名、「牛」1名、「田植子」若干名、「中老」若干名であったという<sup>(67)</sup>。

廃絶する1935年以前のものである中南の御田の参加者の衣装を着けた集合写真がある<sup>(68)</sup>。これには計15名の男性が写っており、烏帽子を被り襷掛けの者2名（1名は模造鉾を持つ）、鉢巻を付け襷掛けの者2名（1名は締め太鼓、1名は太鼓の撥を持つ）、羽織袴姿の者2名、白装束の者1名、花と紙垂の付けられた菅笠を被る田植子（早乙女役）の少年6名が見える。他に比較的高齢の和服姿の者2名が写っている。これを前記の配役と照合すると、烏帽子を被り襷掛けの2名が「舅」と「婿」、鉢巻を付け襷掛けの2名が「太鼓打ち」と「太鼓持ち」、羽織袴姿の2名が「常仕」、比較的高齢の2名が「中老」ということになる。田植子については述べるまでもなかろう。白装束の1名は衣装を脱いだ「牛」であろうか。

田植子は周辺地域の事例と同様に紙垂を付けた菅笠を被っているが、笠の上に大きな造花を飾っているのが目を引く。次に述べる梁瀬の田植子の菅笠には造花はつけられていない。後述するように幕末の嘉永4(1851)年刊の『紀伊国名所図会』後篇では、旧清水町杉野原・久野原の御田の場面の早乙女役たちの紙垂を付けた菅笠の上にも造花が描かれており<sup>(69)</sup>、中南の古写真のかたちが本来の姿であったのかもしれない。

『御田ノ歌ノ寫』には御田の演目の終了後に「それより残りの若者・中老揃てをにをどりをなて」とある。このとき「チョンヤト ヨンヤト」と云って両手の拳を交互に上げ下げしながら足を踏みならして踊ったという<sup>(70)</sup>。後述する梁瀬の「鬼走り」と同様に御田終了後に修正会に登場する鬼の痕跡が見られたのではない。古くはこの場面で前述の上花園神社に伝来する鬼面が用いられていたことも想定できよう。また、7節で触れた野迫川村弓手原のチョンヤ・チョンヤと声をかけながらの「鬼踊り」との関連も考えられ興味深い。

新子では丹生神社境内の仏堂で正月9日に御田が行われたというが、早くに廃絶したのか、次第書・詞章本なども伝わらず、内容は不明とせざるを得ない。おそらく周辺の集落と同様の修正会に付随する御田が伝承されていたのではない。

北寺は1953年の水害で最も甚大な被害を受けた集落であった。北寺では丹生明神と同一境内の「宮寺」で正月18日に御田が行われていたが、後には観音堂（帝釈寺<諦釈寺とも>）で実施されることになり、1961年を最後に御田は廃絶したという<sup>(71)</sup>。また、観音堂境内の宗教法人としては登録されていない小祠が丹生明神で集落の村氏神であるという。観音堂と神

社に関することは1年交替の「神主」が務めている。現在では小規模な修正会だけが1月初旬に実施されている。このように中南と北寺では、修正会（オコナイ）と御田は同一の会場での一連の行事ではあるが、別々の日取りで実施されていた。

かつての御田は昭和16(1941)年の『北寺御田之舞』によると冒頭に「登場人物」として「太鼓打一人」「おももの丈一人（舅殿）」「福太郎一人（婿殿）」「百太郎一人（別鉾上）」「徳太郎一人（別鉾下）」「田植子五人」「牛一人」が挙げられている<sup>(72)</sup>。「登場人物」には記されていないが、詞章には「白シラゲ」「おんなりもち」が見える。概ね現行の花園梁瀬と同様の構成であったことが窺える。『北寺御田之舞』を見るかぎり、天野社の修正会に見られたような鬼の登場や、築瀬の「鬼走り」、中南の「をにをどり」に類するものはなかったようである。

廃絶以前の北寺の御田の参加者の集合写真が残されている<sup>(73)</sup>。ここには観音堂を背景に計9名の男性が写っている。烏帽子を被り襷掛けで短袴を付けた者4名（1名は鼓を持つ）、袴姿の者2名、羽織袴姿の者3名（1名は締め太鼓を持つ）が写っている。田植子（早乙女役）は写っていない。また、背後に僧侶らしき人物の姿が見える。これを前記の『北寺御田之舞』の「登場人物」と対照すると、締め太鼓を持つ1名が「太鼓打」、烏帽子を被る4名が「おももの丈」「福太郎」「百太郎」「徳太郎」で、その中で鼓を持つのが「おももの丈」ということであろうか。袴姿の2名は、あるいは中南の「常仕」に相当するものであろうか。

観音堂には、かつての御田の用具として締め太鼓、鼓の胴、模造鉾、法螺貝などが残されている<sup>(74)</sup>。このうち法螺貝や締め太鼓は現行の修正会でも用いられているという。模造鉾は破損したものも含めて5柄が伝来しているが、『北寺御田之舞』の記載（別鉾上・別鉾下）によれば3名で鉾を用いる所作が演じられたようである。後述する築瀬の「百太郎（脇鉾）」「徳太郎（尻鉾）」の例も参考となろう。残されている模造鉾のうち小振りのものは破損した鉾の補充として調製されたものではなかろうか。これらの鉾には竹製の柄が付けられており、前記の中南の古写真、現行の築瀬の模造鉾と共通するものとなっている。

写真には2点伝わっている締め太鼓のうち大振りのものが写っている。皮を失い胴だけとなった鼓も残されている。これらの用具は、模造鉾は須弥壇裏の物入れに、他は宝永5(1708)年の墨書銘のある櫃に収められている。これらの用具と『北寺御田之舞』の記述、そして写真を併せて、かつての北寺の御田の状況のある程度窺うことができる。

また、櫃には「宝引き」の籤に用いられた瓢箪型の木と竹筒と紐が収められている。瓢箪型の木の表裏に「十一面観世音菩薩」「昭和五年初午厄除」と墨書されている<sup>(75)</sup>。周辺地域では修正会・御田にかぎらず、さまざまな行事・会式などの余興として「宝引き」「ホンビキ」などと称する供えられた餅などが当たる籤引きが実施されてきており、2018年までの後述する旧清水町杉野原の御田の終了後にも初午会式の余興として「ホンビキ」が行われていた。

北寺の御田は各地からの参詣者で賑わい、露店なども出たようで、旧清水町方面からも参詣者があったという<sup>(76)</sup>。7節で触れたように『かつらぎ町美術工芸品調査報告書』には北寺

の御田に「野迫川村から村人がうち揃って峠を越えて参加したという」とあり、野迫川村弓手原では北寺の御田に際しての「北寺参り」が行われていた。前述のように野迫川村弓手原・北今西のオコナイには、和歌山県側の修正会と共通する要素が見られる。これは行事・儀礼・芸能の伝播を考えるための参考となる事例である。

### iii 梁瀬の御田

旧花園村の中心部である梁瀬の御田は、かつては各地の事例と同様に夜間の行事であったが、現在では昼間の行事となっており、西暦奇数年に新暦の2月16日前後の日曜日に開催されている<sup>(77)</sup>。下花園神社から大日堂へ3基の神輿（丹生明神・高野明神・厳島明神）の渡御があり、この途中の空き地に神輿を据え、福太郎・百太郎・徳太郎の3名が田打ちの所作を行う。この場はかつての神田の所在地という。この地域の他の御田には同様の儀礼は見られない。

御田で中心的な役割を果たす白シラゲ・締め太鼓打ち・黒シラゲ（百々の丈）・福太郎・百太郎・徳太郎の6名は遍照寺本堂の軒先で住職から剃刀を受ける。小休止の後、締め太鼓と笛に合わせて参加者全員で大日堂のまわりを3回右繞する。この際に1人が締め太鼓を持ち、もう1人が両撥で太鼓を打つ。前述の中南の「太鼓打ち」と「太鼓持ち」は、このようなたちであったであろうか。かつては堂内の内陣を廻ったが、移転・新築により建物が狭くなったので外を廻るように変更されたという<sup>(78)</sup>。

大日堂での住職による簡略化された修正会の法会があり、若衆1人が鈴を取り物にして「初夜の舞」（神楽）を舞う。このような神楽は7節で触れた野迫川村弓手原のオコナイにも見られたが、和歌山県側の他の現行の修正会・御田には見られない。続いて堂前に多くの破魔矢が撒かれ住民が奪い合う。そして大日堂の内陣で田遊びとなる。

大日堂の内陣は多くの懸け餅、餅花、造花、削りかけなどで荘厳されており、各地の修正会の荘厳と相通じるものとなっている。特に色を染めた米などの穀物でその年のエトの動物と松竹梅の図柄を描き60×30センチメートル程度の縦長の額状にした一對のツクリモノを本尊の納められた厨子の左右に飾るのが特徴的である。実見した際には厨子の向かって右にその年のエトである未（羊）、左に松竹梅となっていた。

これをモリモノと称しているが、先述の奈良県吉野郡野迫川村の北今西のオコナイでは各地に見られる穀物・果物などを串に挿して盛り上げたものをモリモノと称している。和歌山県北部地域でも各地の修正会で北今西と同様のモリモノが見られる<sup>(79)</sup>。一方、同じ野迫川村の弓手原では、梁瀬や後述する旧清水町杉野原の阿弥陀堂の御田と同様の穀物で描いたエトなどの図柄のモリモノが見られた。この独特のモリモノの存在も国境を挟んだ地に位置する両地域の修正会系行事の関連を示すものとして示すことができる。

田遊びの次第は①廻り鍬、②田打ち、③かりむけ、④溝かすり、⑤田打ち、⑥水迎、⑦牛

表 4 築瀬の御田（現在の行事）

	現 状	摘 要
仏 堂	遍照寺境内大日堂	大日堂（大御堂）は戦後に下花園神社境内から移転・新築。
所在地	伊都郡かつらぎ町花園築瀬	中世・近世には高野山領伊都郡花園庄築瀬村。
期 日	2月16日前後の日曜日(隔年)	近世には正月6日。現在は西暦奇数年実施。
祭 場	大日堂	下花園神社境内に所在した大日堂は1961年に解体。
担い手	花園郷土古典芸能保存会	他に同所の「仏の舞い」「松明とぼし」の実施主体となる。
仏事等	練り込み	下花園神社から大日堂へ丹生明神・高野明神・巖島明神の3基の神輿とともに参加者が整列し、大日堂に向かって行列する。神職。
	春田打ち	行列の途中の旧神田で福太郎・百太郎（脇楯）・徳太郎（尻楯）が田打ちの所作を行う。
	おかみそり	遍照寺本堂庭先で仕職から黒シラゲ・締め太鼓役・福太郎・百太郎・徳太郎が剃刀を受ける。
	廻り打ち	神輿を含めて参加者全員が行列をなして大日堂の外周を3回右繞する。旧大日堂のころは堂の内陣を廻った。
	法会	遍照寺仕職による大日堂内陣での修正会。若衆による初夜の舞（神楽）。
演 目	1 廻り楯	福太郎（婿）・百太郎（脇楯）・徳太郎（尻楯）。
	2 田打ち	黒シラゲ（舅、百々の丈）。
	3 かりむけ	黒シラゲ。
	4 溝かすり	黒シラゲ。
	5 田打ち	黒シラゲ・百太郎・徳太郎。
	6 水迎	黒シラゲ。
	7 牛呼び	黒シラゲ・百太郎。
	8 苗代	黒シラゲ。
	9 種おろし	黒シラゲ・徳太郎。
	10 榎供え（祝詞）	座謡の衆の1人。
	11 種蒔き	黒シラゲ。
	12 見廻り	黒シラゲ・福太郎。
	13 婿舅名乗り	黒シラゲ・福太郎。
	14 にしゃも踊り	黒シラゲ・福太郎・百太郎・徳太郎・田植子（早乙女役）5名。
	15 苗取り	黒シラゲ・福太郎・百太郎・徳太郎・田植子5名。
	16 昼飯持ち	おんなり持ち。
	17 苗持ち	黒シラゲ・福太郎。
	18 田植え	黒シラゲ・福太郎・百太郎・徳太郎・田植子5名。
	19 神子の舞い	田植子5名。
	20 植え田の見廻り	黒シラゲ・福太郎。
	21 田刈り	福太郎・百太郎・徳太郎。
	22 榎供え	白シラゲ・黒シラゲ・福太郎。
	23 榎摺り	黒シラゲ・福太郎。
	24 鬼走り	白シラゲ・本太鼓・黒シラゲ・福太郎・百太郎・徳太郎。
*2015年2月22日調査		



呼び、⑧苗代、⑨種おろし、⑩粃供え（祝詞）、⑪種蒔き、⑫見廻り、⑬婿舅名乗り、⑭にしゃも踊り、⑮苗取り、⑯昼飯持ち、⑰苗持ち、⑱田植え、⑲神子の舞い、⑳植え田の見廻り、㉑田刈り、㉒粃供え、㉓粃摺り、㉔鬼走り、となっている（表4）。内陣の四方に楽人と演者が座す。中老は須弥壇・厨子を背にして北側に座して牛王杖のような棒で前に引かれた板を打って拍子をとる。他の演者は南と東西の3面に座す。締め太鼓打ちは南側の中央に座し、太鼓を打つ際には立ち上がる。

築瀬の事例で特徴的な興味深いものとしては、舅の黒シラゲに対して白シラゲと呼ばれる白装束烏帽子姿で帯刀し笏を持つ演者の存在がある。白シラゲはただ1人内陣の西南の隅に置かれた木の切り株に座し、神主もしくは田主役と見られるものである。あるいは白シラゲ・黒シラゲの「シラゲ」は白毛・白髪の意味で元来は白尉と黒尉の面形が用いられたのではなかろうか。後述するように隣接する旧清水町押手の御田でも白シラゲ・黒シラゲが登場したことが次第書により知られ、北寺の詞章にも白シラゲが見えた。

基本的に舅（黒シラゲ）と婿（福太郎）の2名の演者の掛け合いで進行されるが、田打ちなどは「脇鋤」「尻鋤」と呼ばれる百太郎・徳太郎が黒シラゲとともに演じる。百太郎・徳太郎は福太郎からの連想で「百」「徳」の吉祥語を呼称としたものなのであろう。次稿で述べるように他の地域の田遊びに登場する百太郎・作太郎・尺太郎・徳太郎などと共通するもので、百太郎・徳太郎は「脇鋤」「尻鋤」と呼ばれており、廃絶した北寺では「別鋤」と呼ばれていた。他の地域の事例も含めて、これらは福太郎の分身と見るのが適切である。

⑯昼飯持ちの場面では島田髷の鬘を被り女装した「おんなり持ち」が手鏡を見る所作がある。他に類例を知らない演出であるが、前稿で触れた延文6（1361）年5月の年紀をもつ猿投神社（愛知県豊田市）の『貞和五年年中祭礼記』には「女<sup>ケ</sup>假装鏡」との記載があった<sup>(80)</sup>。あるいは猿投神社の田遊びに築瀬の昼飯持ちのような所作があったのかもしれない。

昼飯持ちを「おんなり」と称するのは前稿で触れたように中世以来各地の田遊びに見られるオナリ・ウナリに通じ、比較的近いところでは、奈良県宇陀市大宇陀平尾<sup>すいぶん</sup>の水分神社と同市大宇陀野依の白山神社の御田で昼飯持ちの場面にオナリが登場する<sup>(81)</sup>。上述のよう天野社の御田には昼飯持ちである女装の「田都女」と「れいの坊」の2名が登場する。この地域の事例では前述の北寺の詞章に「おんなりもち」が、後述する押手の詞章に「をんなり持」が見える。他の事例では伝承の過程で欠落したのであろうか。

㉑田刈り、㉓粃摺りとあり、やはり築瀬でも天野社と同様に収穫までが演じられている。最後の㉔鬼走りは、白シラゲが大日堂外陣の向かって左隅に張られた注連縄を刀で切り、白シラゲに続いて締め太鼓打ち・黒シラゲ・福太郎・百太郎・徳太郎の6名がここから退出し、松明を持って大日堂の周りをめぐるものである。あるいは最初の行列と同様に本来は堂内を巡っていたのかもしれない。松明を持つことは修正会と御田が夜間に実施されていたことを示すものである。「鬼走り」とは言っても素面であるが、かつては鬼面を着けての次第であっ

たのではないか。『紀伊統風土記』には天野社に近接する現かつらぎ町志賀の大隆寺（廃絶）の修正会に鬼が登場し、これを「鬼走り」と称したとある<sup>(82)</sup>。志賀の場合は御田の実施の有無は確認できないが、やはり天野社から修正会に付随する鬼が伝播したものと見られる。

梁瀬では61年目ごと（実際にはもう少し短い間隔で実施されている）に「仏の舞」と称する如来面・菩薩面などを用いる行事があり、5面の鬼面も用いられる<sup>(83)</sup>。「仏の舞」は『法華経』巻第4提婆達多品第12の龍女成仏の物語を題材とした仮面劇であるが、劇の内容と使用される面との間には齟齬がある。鬼面は、かつては御田の「鬼走り」の部分に用いられていた可能性がある。各地の事例に多く見られる田遊び終了後に鬼が登場するかたちであったのではないか。

前述のように中南の上花園神社にも、同様の仮面群が伝来しており、やはり2面の鬼面も見られる。中世の天野社の修正会には鬼が登場したことが史料的に確認できた。現在の高野山周辺地域の修正会・御田には、いずれの事例でも鬼は登場しないが、梁瀬と中南では修正会につきものの鬼が登場するかたちであったことが想定できる。

#### iv 旧清水町の御田

高野山奥の院から流れ出す有田川（御殿川）に沿った伊都郡旧花園村の下流に位置する有田郡旧清水町のほとんどの部分は、中世後期には高野山領阿豆川庄であった。上述のように阿豆川庄の領域は花園庄とは異なり、近世には高野山領ではなく和歌山藩領であった。阿豆川庄の領域の各集落（近世村）には仏堂が所在し、それぞれの仏堂で修正会が実施され、修正会に付随して御田が行われることがあった。次第書の伝来などかつての御田の実施が確認できるものとして押手・板尾・井谷の3各集落があり、杉野原と久野原の2集落では2018年・2019年まで御田が実施されていた。

旧花園村の場合と同様に過疎化、特に1953年の有田川大水害により壊滅的な被害を受けて、状況は一変してしまい、多くの集落で行事は廃絶してしまった。最近まで存続していた杉野原の阿弥陀堂と久野原の岩倉神社の御田では修正会の法会の部分はすでに欠落してしまっていた。

旧清水町の最も上流部で旧花園村（梁瀬）との境界に位置する押手の御田については大正5（1916）年の詞章を記した『御田本』が残っており<sup>(84)</sup>、ある程度かつての状況を窺うことができる。これによると「白シラゲ」と「黒シラゲ（おものじよ）」に「福太郎」が登場し、他に「をんなり持」「百田の主」「徳田の主」「市太郎」が見え、前述の梁瀬ときわめて似通った人員構成であり、旧花園村・旧清水町の一連の御田の事例に位置付けることのできるものである。

板尾と井谷については次第書などの伝来は知られておらず、行事の詳細は不明である。板尾については『紀伊国名所図会』の杉野原の阿弥陀堂の項に板尾での御田の実施が触れられ

ており<sup>(85)</sup>、同所の善徳寺（高野山真言宗）に幕末の嘉永6（1853）年の墨書銘のある箱に収められた御田の衣装2着が伝えられている<sup>(86)</sup>。明治41（1908）年に廃絶した板尾の阿弥陀堂での正月5日の修正会・御田に善徳寺の住職が導師として出仕していたという。井谷では葬祭寺院の宝亀寺（高野山真言宗）で近世まで御田や仏の舞が伝承されていたとされるが<sup>(87)</sup>、この宝亀寺での実施が元来の形態であるかどうかは検討の要がある。

旧清水町の領域では、稠密に伝承されていた仏堂での修正会を基盤として、御田の受容された集落が見られたということである。これらの事例は隣接する旧花園村（花園庄）の事例と関連の認められるものであり、その源流は天野社の修正会と御田にあると判断できる。しかし、個々の事例がすべて天野社から直接伝播したものか否かは判らない。この地域の中で2次的な行事の伝播・交流についても留意する必要がある。

## V 杉野原の御田

杉野原の御田は、正月6日に阿弥陀堂で実施されていた。かつては各地の事例と同様に夜間の行事であったが、昼間の行事となっており、2018年まで新暦2月11日に次の久野原と隔年に西暦偶数年に開催されてきた<sup>(88)</sup>。

行事の場となる重要文化財に指定されている阿弥陀堂は、川津明神と同一境内に所在し、永正11（1514）年の建立と伝えられている5間×5間の堂で、全面が吹き放ちとなっている。近年の解体修理・発掘調査の結果、永正11年建立の伝承が肯定的に捉えられ、さらに礎石や地面の火災痕から、火災以前に所在した仏堂が永正年間に再建されたものと判断されている<sup>(89)</sup>。川津明神は神社合祀に際して旧清水町板尾の三大神社に合祀され、宗教法人としては登録されていない。現在では葬祭寺院である雨錫寺（高野山真言宗）も同一境内に所在するが、川津明神は慶長年間（1596～1615年）に、雨錫寺は天明5（1785）年に現在地に移転したものである。

阿弥陀堂の内陣は葉の付いた青竹、椿の枝に挿した造花、青竹に付けた削りかけなどで荘厳されているが、梁瀬に見られた懸け餅は無い。須弥壇の仏前に3つの三宝が置かれ、中央には小餅が積み上げられ、左右には果物と野菜が盛られていた。他に奉納者の名を食紅などで記した鏡餅などが供えられていた。御田開始前の「裸苗押し」が終わると内外陣の境目に置かれていたモリモノが須弥壇上の左右に移される。前述の梁瀬と同様に米などの穀物を染めて額状の絵としたものである。実見した2014年は午年であったので、左には馬の図柄が置かれ、右には梁瀬と異なり、前年のエトの巳の蛇の図柄をあしらったものが置かれていた。

2018年まで実施されていた行事は、雨錫寺本堂前に参加者が整列して境内の川津明神へ渡御し、神職による修祓の後、阿弥陀堂に入り、所定の位置に着座して始まる。実見した際には僧侶による修正会の法会の部分はなかった。御田の開始に先立っての渡御は梁瀬、久野原でも見られ、この地域の御田の特色としてよいものであろう。

続いて下帯姿の男たちが阿弥陀堂外陣の炉を囲んで「裸苗押し」と呼ばれる23番までの「謡い囃し」を歌う。このような裸男による揉み合いは各地の新春行事に少なからず見られるものであるが、この地域の御田の現行事例では杉野原の例だけである<sup>(90)</sup>。

演目は①かいなんだし、②世の中踊り、③四方鋤（田打ち）、④岸刈（畦塗り）・水向け（溝

表5 杉野原の御田（2018年までの行事）

	内 容	摘 要
仏 堂	阿弥陀堂	河津明神・雨錫寺と同一境内に所在。
所在地	有田郡有田川町杉野原	近世には和歌山藩領有田郡杉野原村、中世には高野山領阿豆川庄。
期 日	2月11日（西暦偶数年）	前近代は正月6日、2018年を最後に休止。
祭 場	阿弥陀堂内陣	河津明神は慶長年間、雨錫寺は天明5（1785）年に現在地へ移転という。
担い手	杉野原の御田舞保存会	
神事等	お渡り 神道祭式 裸苗押し 初午会式	雨錫寺本堂前→河津明神→阿弥陀堂。御田参加者全員。 河津明神。神職執行。 10数名の下帯姿の若者が阿弥陀堂外陣の炉を囲んで揉み合う。 御田終了後にホンビキ（籤引き）、餅撒きがある。
演 目	1 かいなんだし	太鼓1名・相打太鼓1名。
	2 世の中踊り	太鼓1名・相打太鼓1名・婿1名・舅（重之衆）1名・田刈1名。
	3 四方鋤	舅1名。
	4 岸刈・水向	舅1名。
	5 牛呼び	舅1名・太鼓1名・婿1名・田刈1名。
	6 牛呼び 世の中踊り	舅1名・太鼓1名・婿1名・田刈1名・牛1名。
	7 牛に伺詞	舅1名・婿1名・牛1名。
	8 肥さがし	舅1名。
	9 野草踏み	舅1名。
	10 水向	舅1名。
	11 牛洗い	舅1名。
	12 堂塔（徒）ぼし	舅1名・婿1名・田刈1名。
	13 祝詞	舅1名。
	14 種蒔き	舅1名。
	15 芽干し	舅1名。
	16 水向	舅1名。
	17 福女踊り	舅1名・相打太鼓1名・太鼓1名・婿1名・田刈1名。
	18 こせあい	舅1名・婿1名。
	19 こぞうにもよう	舅1名・婿1名・田刈1名・田植子（早乙女役）5名。
	20 若苗取り	舅1名・婿1名・田植子5名。
	21 田植え	舅1名・婿1名・田植子5名。
	22 穂参らせ	舅1名・婿1名。
	23 田刈り	舅1名・婿1名・田刈1名。
	24 糶すり	舅1名・婿1名。
*2014年2月11日調査		

漂え）、⑤牛呼び、⑥牛呼び世の中踊り、⑦牛に伺詞（飼葉）、⑧肥さがし、⑨野草踏み、⑩水向け、⑪牛洗い、⑫堂塔（徒）ぼし（祝詞）、⑬祝詞、⑭種蒔き、⑮芽干し、⑯水向、⑰福女踊り、⑱拒障合、⑲こぞうにもよう、⑳若苗取り、㉑田植え、㉒穂参らせ、㉓田刈り、㉔粃すり、となっている（表5）。

舅（重之衆）と婿の2人を主な演者として行われ、他に2名の脇楯、1名の締め太鼓打ち、1名の相打締め太鼓役、牛役1名、田植子（早乙女役）5名が登場する。概ね前述の梁瀬および後述する久野原の事例と共通する内容となっている。ただ、梁瀬とは異なり、田遊び終了後の「鬼走り」の部分はなく、鬼面も所蔵されていない。また、杉野原と久野原では、梁瀬の1名と異なり、締め太鼓役は2名となっている。

㉑若苗取りと㉑田植えに登場する田植子の菅笠には全体に細かく切った色紙が貼られ、中心部には白い造花が着けられている。㉒穂参らせから㉔粃すりまでの収穫の部分は田植子ではなく、婿と脇楯で演じられる。

⑭種蒔きの場面での祝詞（現状では、⑫堂塔ぼしの場面での祝詞に続けて読まれる）には、阿弥陀堂の鎮守神である川津明神だけでなく、弘法大師や丹生四社明神も見え、やはり、高野山や天野社との深い関係を窺わせるものとなっている。前述のように杉野原の含まれる阿豆川庄の領域は近世には高野山領ではなかったので、江戸時代になってから、このような祝詞を読むことを含む行事が新規に開始されるようになったとは考えられない。これまで見てきた高野山周辺地域の事例と同様に、中世後期には在地の行事として杉野原の修正会に付随して御田が実施されるようになっていたのであろう。

## vi 久野原の御田

久野原の御田は、かつては各地の事例と同様に夜間の行事であったが、昼間の行事となっており、西暦奇数年の2月11日に杉野原と隔年で開催されてきたが、前述のように杉野原は2018年、久野原は2019年を最後に休止となった<sup>(91)</sup>。前近代には正月9日の行事であった。行事の場は久野原小学校裏の岩倉神社の社前の露天の仮設舞台であるが、小学校設立以前には現在の学校敷地に神社や仏堂が建っていたという<sup>(92)</sup>。

これまで見てきたように、この地域（旧花園村・旧清水町）では大日堂・阿弥陀堂などの仏堂で御田が実施されるのが一般的である。久野原の場合も幕末の嘉永4（1851）年の『紀伊国名所図会』後篇の「久野原の村民前年正月十日より後に生まれたる小児を（中略）併に御田躍をなす図」には須弥壇の示された仏堂と見られる建物内での御田の場面が描かれている<sup>(93)</sup>。元来は仏堂での行事であったのであろう。

御田の開始に先立って神社から300メートルほど離れた国道480号線に面する幟を立てた参道（馬場）の入り口から神社まで「お渡り」が実施される。この行列には母親などに抱き抱えられた生後1年未満の新生児が加わっており、氏子入りを兼ねたものとなっている。この



氏子入りを含む行列は、やはり『紀伊国名所図会』に描かれており、近世以来の状況と見られる。7節で見た粟生・中原の堂徒式と同様、修正会に村入りの行事が付随しているわけである。

現状では露天での行事であり、神社行事と位置付けられていることもあり、前述の梁瀬や杉野原のような荘厳は見られない。行列には長い竹に付けた藁苞に五色の紙を付けた竹（紙花）と多くのゴム風船を挿したものを持つ者が加わっており、これは行列が神社へ到着する

表6 久野原の御田（2019年までの行事）

	内 容	摘 要
神 社	岩倉神社	前近代には仏堂での行事。現在は学校敷地となっている辺りに前近代には仏堂・神社が存在した。
所在地	有田郡有田川町久野原	近世には和歌山藩領有田郡久野原村、中世には高野山領阿弓川庄。
期 日	2月11日（西暦奇数年）	近世には正月9日。2019年を最後に休止。
祭 場	社前仮設舞台	小学校校舎と神社の間の露天に板敷の仮設舞台を設営する。
担い手	久野原の御田保存会	
神事等	行列 初渡り	国道から参道（馬場）を神社へ向かう。参加者全員。 行列に生後1年未満の新生児が母親に抱き抱えられて加わる。
演 目	1 発端・世の中踊り	行列の主な参加者。
	2 鉦初め	舅（中之蒸）1名・締め太鼓2名、婿（福太郎）は舞台南側に控える。
	3 溝漂え	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	4 水向け	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	5 牛呼び・田おこし	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	6 畔ぬり	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	7 田かき	舅1名・締め太鼓2名・牛1名、婿は舞台南側に控える。
	8 肥持ち・田ならし	舅1名・締め太鼓2名・牛1名、婿は舞台南側に控える。
	9 粃持ち	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	10 田常祭	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	11 粃蒔き	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	12 縄ない	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	13 俵編み	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	14 苧紡ぎ	舅1名・締め太鼓2名、婿は舞台南側に控える。
	15 苗誉め	舅1名・締め太鼓2名・早乙女役（田植子）5名、婿は舞台南側に控える。
	16 福田・婿登場	舅1名・婿1名・締め太鼓2名
	17 こせあい 拒障合	舅1名・婿1名・締め太鼓2名
	18 苗取り	舅1名・婿1名・締め太鼓2名・早乙女役5名。
	19 田植え	舅1名・婿1名・締め太鼓2名・早乙女役5名。
	20 ササラ踊り	舅1名・婿1名・締め太鼓2名
	21 稲刈り	舅1名・婿1名・締め太鼓2名・早乙女役5名。
	22 初穂献供	舅1名・婿1名・締め太鼓2名・早乙女役5名。
*2019年2月11日調査		

と社殿と舞台の間の木に結び付けられる。『紀伊国名所図会』には3本の造花を束ねたように見えるものを行列中の5人の少年が捧げ持つ様子が描かれている。あるいは紙花と風船を挿した藁苞はかつての造花の変化したものなのかもしれない。

梁瀬や杉野原の御田と同様に、素面の舅（中之蒸）と婿（福太郎）の2人を主な演者として行われるが、詞章はこの両名ではなく、舞台の両脇に控える「座謡衆」が唱える。他に牛役1名、早乙女役（田植子、4・5歳の幼児）5名、締め太鼓役2名が演じる。

演目は①発端（世の中踊り）、②鋤初め（田打ち）、③溝渌え、④水向け、⑤牛呼び・田起こし、⑥畦塗り、⑦田搔き、⑧肥持ち・田ならし、⑨糶持ち、⑩田常祭（水口祭）、⑪糶蒔き、⑫縄ない、⑬俵編み、⑭苧紡ぎ、⑮苗誉め、⑯婿呼び・福田、⑰拒障合、⑱苗取り、⑳田植え、㉑田刈り、㉒初穂となっている（表6）。

概ね梁瀬・杉野原と共通する内容であるが、2名の締め太鼓役が最初から最後まで舞台上で太鼓を打つのが異なる。また㉑田刈り（稲刈り）を⑮苗誉め、⑱苗取り、㉒田植えと同じく早乙女役が模造の鎌を持って演じるのが珍しい。稲刈りを早乙女役が演じるのは全国的に見ても特異なものであり、伝承の過程での変容と捉えるのが適切であろう。ただ『紀伊国名所図会』には外陣に控える5名の早乙女役が模造の鎌と見られるものを持って描かれており、少なくとも近世後期には現状のような演出であったようである。『紀伊国名所図会』には早乙女役の菅笠の上に造花が付けられているが、2019年まで実施されていた行事では、菅笠には全体に貼られた細かな色紙はあったが造花は見られなかった。

⑦田搔きの場面には牛が登場する。和歌山県南部の熊野地域では、実際に牛に馬鋤を引かせての水田での競技が田搔きとの呼称で第2次世界大戦後しばらくの頃まで各集落で盛んに実施されていた<sup>(94)</sup>。和歌山県中部の有田川中流域の久野原で牛耕の場面を田搔きと称しているのが興味深い。

## 10 高野山周辺地域の御田の構成要素

以上、高野山周辺地域の貴志川・有田川流域の御田の事例を現行および近年まで実施されていたものを中心に概観してきた。この地域の修正会に付随して伝承されてきた御田の行事の内容——構成要素を表7に示した。天野（丹生都比売神社）については修正会と御田が同日に実施されていた神仏分離以前の状況を示した。現行の真国宮と梁瀬、および近年まで実施されていた杉野原と久野原の事例は実見調査を中心とし、次第書・詞章本などを参考に示したものである。廃絶例の中南・北寺・押手は伝来する詞章本を中心にまとめているので不明の点は空欄とした。

神社行事として位置付けられている真国宮と久野原では現状では修正会の法会の部分などの仏事は見られない。阿弥陀堂での行事である杉野原でも同様である。天野の場合は神仏分

表7 高野山周辺地域の御田の構成要素

	天 野	真国宮	中 南	北 寺	梁 瀬	押 手	杉野原	久野原
仏 事	○	—	○	○	○		—	—
神 事	○	○			○		○	○
渡 御	—	—			○		○	○
田遊び	○	○	○	○	○	○	○	○
穂長の尉	田人	花賀の丞	おものぢやう	おもの丈	百々の丈	おもものじよ	重之衆	中の丞
福太郎	牛飼	福太郎	婿	福太郎	福太郎	福太郎	婿	福太郎
昼飯持ち	田都女 れいの坊	—	—	おんなりもち	おんなり持ち	をんなり持	—	—
鬼の登場	○	—	△		△		—	—

離により仏教色は一掃され神社の行事となった。観音堂での行事である北寺の場合も次第書では仏事の実施は確認できないが、前述の集合写真の背後には僧侶の姿が写っていた。御田に際して僧侶による仏事が実施されていたのであろう。この地域の御田は、修正会と同日に実施される行事であった天野社の御田が、在地の仏堂での修正会に付随する行事として受容されたと見るのが適切なものである。

梁瀬・杉野原・久野原の3例に見られる渡御は前近代の天野社の行事では確認できない。これは在地の行事として受容され定着してゆく中で付加された要素ではなかろうか。他の地域の田遊びにもあまり見られないもので、この地域の御田の特色とすべきものではないか。

さて、天野社をはじめとして、この地域の御田は主たる演者2人と数名の早乙女役によって演じられるものとなっている。各地の田遊びには主たる演者2人で実施されるものと多くの演者が役割を分担して個々の演目演じるものとがある。多くの田遊びの事例が伝承されてきた東海地方では、地方顕密寺院や諸国一宮など比較的大きな宗教施設での行事には演者2人のタイプが多く、集落の仏堂などの宗教施設での行事には役割分担のタイプが多く見受けられる。早乙女役の少女（天野社）から少年（他の事例）への変化についてはすでに述べた。

この地域の御田は主たる演者2人およびその変形と見られるものとなっている。ここでは御田の主な演者である舅と婿の呼称に着目したい。天野社と真国宮の2人は着面で、他の事例ではいずれも主な演者は素面となっている。天野社では白尉面を着けるのを「田人」、黒尉面を着けるのを「牛飼」としている。この天野社の呼称は他の事例とは大きく異なる。

真国宮では土俗的な面を着けた舅と婿を「花賀の丞」と「福太郎」と称している。中南では「おもものぢやう」と婿、北寺では「おももの丈」と「福太郎」となっていた。梁瀬では舅を「黒シラゲ」もしくは「百々の丈」、婿を「福太郎」と称している。押手では舅を「黒シラゲ」もしくは「おもものじよ」、婿を「福太郎」としていた。杉野原では「重之衆」と婿、久野原では「中の丞」と「福太郎」となっていた。また、日高川流域の日高川町（旧美山村）串本

でも台本によれば「大茂之亟」と「福太郎」が見える<sup>(95)</sup>。

これらの「花賀の丞」「おものぢやう」「おもの丈」「百々の丈」「おものじよ」「重之衆」「中の丞」「大茂之亟」は次稿で詳しく述べる他の地域の事例から見て「穂長の尉」の転訛や誤記と判断できる。婿は8例中5例で「福太郎」となっている。「福太郎」もまた東海・近畿地方の田遊びの事例に多数見られ類例も少なくない。他の「百太郎」「徳太郎」「百田の主」「徳太の主」も各地に類例が見え、これらは「福太郎」の分身であることを述べた。

梁瀬と押手の舅は「黒シラゲ」とも呼ばれていた。これは「白シラゲ」と対になるもので、「穂長の尉」の性格が舅と田主（神主）の2面に分離していった結果であろうとした。また、「白シラゲ」「黒シラゲ」の「シラゲ」は白髪・白毛の意で元来は黒尉と白尉の面形が用いられていたのではないかと想定した。天野社の「田人」と「牛飼」は黒尉と白尉の面形を着けているが、呼称は他の例と異なる。あるいはこの「田人」「牛飼」の呼称はあたらしい時代における変化である可能性もあろう。

天野社では食物を運び給仕する女装の昼食持ちの役は「田都女」と「れいの坊」の2度登場する。これに対して梁瀬では「おんなり持ち」が登場し、北寺と押手の次第書にも「おんなりもち」「をんなり持」が見える。他の事例では昼食持ちの次第が欠落してしまったのであろうか。昼食持ちをオナリ・ウナリなどと称することについては、中世以来他の地域にも見られることは述べた。天野社の「田都女」「れいの坊」の呼称および2度にわたって登場することも、やはり新しい時代の変化の可能性があろう。

前近代の天野社・山王堂で実施されていた修正会には2名の鬼が登場した。梁瀬では御田の終了後に「鬼走り」の次第があり、元来はこの場面で鬼面を着けた者が登場したのではないかと想定した。中南では御田終了後に「をにをどり」があったという。梁瀬と中南には鬼面が伝えられている。天野に隣接する現かつらぎ町志賀の大隆寺（廃絶）の修正会では鬼面を着けた鬼が登場する「鬼はしり」があったという。梁瀬の「鬼走り」と中南の「をにをどり」は、この地域の修正会に付随するものとして伝播・定着した御田に鬼の登場があったことの名残であろう。

## 11 小結と展望

本稿で取り上げた高野山周辺地域の御田の事例は、この地域に稠密に伝承されてきた仏堂での修正会系行事（オコナイ）を基盤として、修正会に付随するかたちで受容されたものであった。行事・儀礼の発信地は天野社（丹生都比売神社）であった。神仏習合状況の施設であった中世の天野社で出合った田遊び（御田）と修正会が中世の高野山領荘園に含まれる地域に伝播・定着していったのである。

この地域の御田の受容の基盤となった稠密に分布する仏堂とそこで実施される修正会系行

事に注目する必要がある。畿内とその周辺には、この地域と同様に集落の中心的な宗教施設としての仏堂が少なからず伝存している。また、東海地方や北陸地方にも同様の仏堂が存在する地域があり、このような仏堂の拡がりには日本列島中央部にひろく見られたものとすることができる。仏堂の形態には地域差があり、集落の中での仏堂の位置付けも各地域の歴史的・宗教的環境により異なる面が見られる。

このような広範に見られた仏堂とそこで実施されてきた行事とを日本宗教史の文脈で捉える必要がある。次稿では、高野山周辺地域の仏堂と修正会（オコナイ）と御田を、他の地域の事例と比較・検討することによって、この地域の独自な点、他の地域と共通する点の双方に目を配り、仏堂をめぐる宗教・行事・儀礼・芸能の中での高野山周辺地域修正会と御田の特性を明らかにしたい。

【註】

- (1) 坂本亮太「村の牛玉宝印」（『民俗文化』29 2017年）。
- (2) 森雄一「惣堂・村堂の存在形態—和歌山県清水町の事例を通じて—」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』2003年）。
- (3) 2018年1月4日調査。有田川町教育委員会編『国指定重要無形民俗文化財杉野原の御田映像記録解説書』（有田川町教育委員会 2017年）169・170頁参照。牛玉宝印の印文は「牛玉／観音寺／宝印」となっており、朱の宝印は捺されていない。
- (4) 桜井隆治『伊都郡の隅から隅』（『日本民俗誌集成』15 三一書房 1997年 初出は1954年）、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会 2015年）72～112頁など。
- (5) 2018年9月18日調査。
- (6) 和歌山県立博物館編『移動する仏像—有田川町の重要文化財を中心に—』（和歌山県立博物館 2010年）4～21頁にこれらの仏像の写真が掲載されている。
- (7) 清水町誌編集委員会編『清水町誌』下（清水町 1995年）597頁。
- (8) 2017年2月4日調査。
- (9) 清水町文化財保護審議委員会編『清水町の民俗行事—杉野原の御田舞ほか—』（清水町教育委員会1984年）60頁。
- (10) 嘉永4（1851）年刊の『紀伊国名所図会』後篇卷之3に「粟生村／岩倉神社／泉石の勝景」として巨岩と岩倉神社の図を掲げ、岩倉神社の項に「粟生村にあり、四箇村の産土神なり、祭禮九月二日、流鏑馬あり／在田川の上流社前を流る、川中に靈巖ありて高さ六丈に餘れり＜神名の岩倉これによりて稱ふ、倉は嶽といふに同じ、詳に熊野神倉の條に見ゆ、神主を岩橋某といふ＞、四村川の奔流、南より來りて此に合流す、南岸相狹り、巖より巖に一片の板を横へ橋に換へたり、森茫たる水勢耳を穿ち、頓に心垢を滌ぎつべし、限なき幽邃の地にして在田川の風致、この處を第一といはむ可なり」とある。
- (11) 清水町誌編集委員会編『清水町誌』史料編（清水町 1982年）836～839頁参照。
- (12) 実見した際には、祖母が集落外在住の幼児の写真を持って香水を受けることも見られた。
- (13) この牛玉宝印は版木での摺り物ではなく、半紙に「牛の玉／宝の印／粟生薬師堂」と墨書されたものである。
- (14) 註(11)前掲、清水町誌編集委員会編『清水町誌』史料編836～839頁参照。



- (15) 2018年1月5日調査。
- (16) 2019年11月9日調査。和歌山県立博物館寄託。和歌山県立博物館編『有田川中流域の仏教文化』（有田川町教育委員会 2017年）16頁などに鰐口の写真が掲載されている。陽鑄されている銘文は「阿豆川下庄中原善福寺御寶前敬白／天文十年<辛丑>十月吉日願主兼尊」となっている。なお、現状では阿弥陀堂にはレプリカの鰐口が懸けられている。
- (17) 同行した黒田龍二氏の教示による。
- (18) 註(9)前掲、清水町文化財保護審議委員会編『清水町の民俗行事』43頁。また、廃絶した有田川町押手の御田の詞章に「をとほし□もてこい」とあり、前後から□は粃とあったと見られ、他の事例でも同様の場面があったようである。有田川町清水行政局保管コピー。表紙に「大正五年旧正月新調／御田本／藤上信一郎記」とある。註(4)前掲、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』267～274頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (19) 奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村民俗資料緊急調査報告書』（奈良県文化財調査報告書第18集 奈良県教育委員会 1973年）、野迫川村史編集委員会編『野迫川村史』（野迫川村役場 1974年）、奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村のオコナイ解説書—北今西・弓手原—』（奈良の文化遺産を活かした総合地域活性化事業実行委員会 2018年）など。平では新暦1月2日に同所の地藏堂（平等寺）でオコナイが実施されている。平のオコナイは正月5日を経て1月5日を期日としていたが、現在では1月2日午前中のユミハジメ（弓射儀礼）に先立つての行事となっている。
- (20) 2020年1月2日調査。
- (21) 註(19)前掲、野迫川村史編集委員会編『野迫川村史』957～961頁。
- (22) 松長有慶『高野山』（岩波新書 2014年）69頁に「宝来」の写真が掲載されている。
- (23) 徳蔵寺は敷地・建物を失っているが、宗教法人としては現在も登録されている。
- (24) 以下に記す弓手原のオコナイについては、註(19)前掲の諸書、特に近年の状況は奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村のオコナイ解説書』の記述および2015年の行事を収録したDVDである奈良の文化遺産を活かした総合地域活性化事業実行委員会『野迫川村のオコナイ—北今西・弓手原—』（2016年）による。
- (25) 註(19)前掲、奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村民俗資料緊急調査報告書』110頁。
- (26) 註(19)前掲、奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村のオコナイ解説書』34頁などに版木の写真が掲載されている。銘文は「享祿四<辛卯>潤五月廿六日／専順再公之」となっている。
- (27) 註(19)前掲、奈良県教育委員会文化財保存課編『野迫川村民俗資料緊急調査報告書』109・110頁。
- (28) 註(19)前掲、野迫川村史編集委員会編『野迫川村史』559頁。
- (29) かつらぎ町文化財調査検討委員会編『かつらぎ町美術工芸品調査報告書』（かつらぎ町文化財調査検討委員会 2019年）230頁。
- (30) 脊古真哉「高野山開創説話と丹生明神・高野明神」（『日本仏教総合研究』16 2018年）。
- (31) 『金剛峯寺山王院長床山上山下雑記』の冒頭に読経・牛王宝印加持・吉書に続いて「一、  
御田之次第／ヲノ、ヽ社参之儀式作法アリ、ヲナシキフタイニテ御田植アリ、ヲワツテ例時候、  
所作者、理趣經一クワン、サンハカリナ也、ヤカテ小アンセチヘ出仕アリ、タサイシキアリ、  
シタテハ、イ、ハ年ヨ、ヲ、シルハカミアツカツ所、ハシトモニ、ヲ、シルノ上ニタウフアリ、  
役人ハ上アツカツシヨ代ノヤク也、造作ノ料ハ壹石壹斗八升、ヲサメ枡ニテ可渡／同采ノキキ  
清、同牛蒡、同ヒラキマメハ壹升也／一、兩預所ヨリ御田儀式之時、散米三升ツヽ、同サケ三  
升宛出候、同福蒔之種子モ三升ツヽ、シヤクマイリテ、金剛供アリ、ハシメニコツハ土器、ノ  
チーコンハサンノコ、サイシキノケイエイ衆ハ四人ノカ、ツ所ヨリ一人ツヽ、イ、四ハイ、サケ  
一升下行」とある。和多秀乗校注『神道大系』論説編1 真言神道上（神道大系編纂会 1993年）

355～378頁に史料の全文が翻刻されている。『金剛峯寺年中行事』の二月分の前（正月分ということになる）に「一天野社十四日御祭 六人」とある。中田法壽『高野山文書』第3巻（高野山文書刊行会 1941年）177～191頁に史料の全文が翻刻されている。『天野社雑記』の「御田支度之事」に「一モチハ舊冬一度調置之、床中配進之、モチ別山ヲク、天野下分六十枚斗可有之、莊嚴之事大工可被付之、神前御供、調之時、社家ヨリ御出仕アレト告來ル時、伴僧召連出仕、經一卷了ノ時、社人御田之祝儀アリ、神前了、於小庵室祝儀、御精進供等如常、鬼之餅一枚ツ、菜ハホタ木壹束、ヘキノ上居士器共也、如此之膳、兩年預居之、左右座獻杓有、護摩壇鬼餅三枚ツ、三通九枚、ホタ木一束ツ、／斧始トテ白米三升半、紙貳帖、大工渡之、日中續松五ツ支度、夜入、人足貳人鬼ナシテ山王院籠／一今日、四之祝子二百文持參、百文者大工遣之、百文上年預之宿主遣之、下年預之宿主續松之殘遣之、其内一續松社人之内。沙汰人ト云モノ取之／以上了、十五日歸山、十六日餅クハル」とある。前掲、和多氏校注『神道大系』論説編1 真言神道上381～409頁に史料の全文が翻刻されている

- (32) 『金剛峯寺山王院長床上山下雜記』に「一、修正ノ出仕ハツ子ノコトシ、同タン供ハ人別一枚ツ、タツヘシ、トウ明三トウ、年預ヨリトホスヘシ、修正スキテメヲニノタイマツ、年ヨタイトツテ火クチ三尺ヲトリ、小アセチニテ火ヲトモシツキ、殘ル續松ハラノ々々シハイス有來コトク也、任 例トル方エ配分可有也」とある。前掲、和多氏校注『神道大系』論説編1 真言神道上。
- (33) 当該部分が「修正過テ毒鬼ノ續松年預代取テ小菴室ニテ火ヲトモシツキ」となっている。中田法壽編『高野山文書』第1巻（高野山文書刊行会 1937年）491～510頁に史料の全文が翻刻されている。
- (34) 註(31)前掲。
- (35) 註(31)前掲。
- (36) 和歌山県立博物館編『高野山麓 祈りのかたち』（和歌山県立博物館 2012年）66頁などに写真が掲載されている。
- (37) 2013年1月20日調査。天野社の御田は少なからず取り上げられてきているが、現状と史料の双方に目を配った比較的近年の論考として、伊藤信明「天野の御田」（『和歌山県立博物館研究紀要』10 2003年）、丹生都比売神社史編纂委員会編『丹生都比売神社史』（丹生都比売神社 2009年）256～266頁がある。
- (38) 伊藤信明「江戸時代の天野の御田祭—新資料『天保六年御田印帳』について—」（『史泉』101 2005年）。
- (39) 『御田手引草』では「早乙女四人」となっている。註(37)前掲、丹生都比売神社史編纂委員会編『丹生都比売神社史』315～318頁に史料の全文が翻刻されている。近年の写真でも4名の早乙女役で実施されているものがあるので、実見した際の3名は例外的な事態であったのであろう。
- (40) 『御田手引草』では「田人云／れいの坊、／田づめ以前の装束にて休神酒を頭にのせ出て來る」とあるが、実見した際には「れいの坊」と「田都女」は異なる衣装であった。
- (41) 近年では少子化の影響などで少女が務めることも少なくない。
- (42) たびたび高野山に参籠し、高野山に葬られたことから高野御室と称される覚法法親王（1091～1153年）の参籠記である『御室御所高野山御参籠日記』の久安6（1148）年6月10日条には高野山への途次に宿泊した天野社で「今朝先參丹生御寶前、奉幣帛牽神馬、又貢蒔繪手箱入種々物、其次召八女令歌舞、給繪扇了、其後退下」とあり、天野社には歌舞を勤める「八女」がいたことが記されている。高野山文書又続宝簡集200。
- (43) 中川善教「高野山修正会考」（『密教文化』63 1963年）。
- (44) 註(37)前掲、丹生都比売神社史編纂委員会編『丹生都比売神社史』263頁。
- (45) 新井恒易『農と田遊びの研究』下（明治書院 1981年）227～302頁に和歌山県の高野山周

辺地域の御田の事例が取り上げられている。他に註(4)前掲、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』など。

- (46) 『紀伊続風土記』巻之47伊都郡志富田荘の東志田村の蟻通明神社の項に「毎年正月十一日御田植といへる神事あり、神職・禰宜あつまり田植の状をなして米を蒔く、参詣の人これを拾ひ十五日の粥に入れ食して年中の邪氣を除くといふ」とある。この「御田植」は神社の行事として神職らによって実施されていたようであるが、同書同項には「別當 神宮寺／氏神の側にあり、本堂・釣鐘堂・僧坊等あり」とあって、やはり修正会と結び付いたものであった可能性もある。
- (47) 美山村史編さん委員会編『美山村史』史料編（美山村 1991年）312～317頁に御田の次第書である明治16(1883)年の『御祭札御田精録』の翻刻が掲載されている。
- (48) 長谷丹生神社文書の安政5(1858)年の『勘録支配帳』。紀美野町美里町誌編纂委員会編『美里町誌』史料編1（紀美野町 2007年）16～18頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (49) 花坂の鳴川神社境内の観音堂で「御田の舞」が行われたが、内容は神楽で模擬耕作の所作は見られなかったという。高野町史編纂委員会編『高野町史』民俗編（高野町 2012年）174・175頁。
- (50) 中世・近世の神野・真国地域については、水田義一「神護寺領紀伊国神野真国庄絵図について」（藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上 大明堂 1978年）参照。
- (51) 註(45)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下240頁。
- (52) 森本一彦「高野山周辺の御田—真国を中心に—」（『民俗文化』29 2017年）。
- (53) 2017年2月2日調査。2017年は2月3日が旧正月7日に当たったが、神職の都合により2月2日に実施された。
- (54) 和歌山県立博物館編『中世の村をあるく—紀美野町の歴史と文化—』（和歌山県立博物館 2011年）120頁に関係史料の写真が掲載されている。
- (55) 註(45)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下242～247頁などに詞章の翻刻が掲載されている。
- (56) 註(52)前掲、森本氏「高野山周辺の御田」に掲載されている1980年代の広域市町村圏郷土芸能競演会での公演の際の写真の衣装は着ぐるみ風のもののようである。また、大阪市平野区の杭全神社の御田植祭に登場する牛の衣装も着ぐるみ風のものとなっている。2019年4月13日調査。
- (57) 註(54)前掲、和歌山県立博物館編『中世の村をあるく—紀美野町の歴史と文化—』120頁。
- (58) 花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』（花園村 2005年）19～26頁に現存する池之窪（新子村の内）阿弥陀堂・北寺観音堂・梁瀬大日堂・峯手地藏堂・白谷観音堂・有中釈迦堂の各集落の仏堂の写真が掲載されている。これらの仏堂については2017年8月11日に踏査を実施した。また、北寺の南垣内には和歌山県の文化財に指定されている地藏堂が所在し、天井に打ち付けられている棟札には「(梵字) 奉立地藏堂一字天正十七年<□丑>十一月廿八日」と天正17(1589)年の墨書の銘文がある。2019年9月25日調査。
- (59) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』178頁に水害直後の下花園神社や大日堂を含む地域の写真が掲載されている。
- (60) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』35頁、齊藤和枝『高野山麓の民俗—花園村の歌と年中行事—』（名著出版 1985年）11頁など。
- (61) 地藏堂の跡は現在では花園（中南）保健福祉館となっている。保健福祉館は1967年に建てられたという。
- (62) 2019年9月24日調査。印文は「牛王／福王寺／寶印」。版本の大きさは23.7センチメートル×37.0センチメートルである。
- (63) 2019年9月24日調査。大阪大学文学部国史研究室編「中南区有文書」（『大阪大学文学部紀要』

- 20 1980年)に史料の翻刻が掲載されている。
- (64) 2019年11月8日調査。和歌山県立博物館寄託。大河内智之「上花園神社仮面群と高野山周辺の仮面芸能」(赤松徹真編『日本仏教史における「仏」と「神」の間』龍谷大学仏教文化研究所 2008年)参照。
- (65) 例示すれば当麻寺(奈良県葛城市、高野山真言宗・浄土宗)の練供養(二十五菩薩来迎会)を当麻のレンゾと称しており、奈良盆地では田植えの後などの農休みに周辺の農民が多数参詣する寺社の行事を〇〇のレンゾと呼んでいた。
- (66) 註(4)前掲、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』253～258頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (67) 阪本覚一郎『御田の舞』(私家版 1975年)2・3頁。
- (68) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』52頁。
- (69) 『紀伊国名所図会』後篇之3の「杉野原村阿彌陀堂にて例年正月七日御田跳をなして年豊を祈る図」「久野原の村民前年正月十日より後に生まれたる小児を(中略)併に御田躍をなす図」。
- (70) 註(67)前掲、阪本覚一郎『御田の舞』24頁。
- (71) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』53頁。2019年9月25日の北寺での聞き取りでは1963年を最後に廃絶したという。なお、註(45)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下280・281頁では帝釈寺観音堂は取り除かれたとするが現存する。また、明徳3(1392)年の銘のある梵鐘もあったとする。坪井良平『日本古鐘銘集成』(角川書店 1972年)252頁の「225遍照寺鐘」の項には「もとは同村北寺の徳竜寺観音堂の軒に懸っていたが、近年遍照寺で保管されることになった」とある。現状では再び帝釈寺観音堂の軒先に懸けられて現存する。陰刻銘は第1区に「徳龍寺之鐘」、第2区に「明徳三年<壬申>二月日」となっている。2017年2月4日調査。
- (72) 有田川町清水行政局保管コピー。奥書は「昭和十六年旧正月吉日／北寺田首丑之助書」となっている。註(4)前掲、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』259～266頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (73) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』104頁。
- (74) 2019年9月25日調査。
- (75) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』105頁に比較的近年のものと見られる「宝引き」の写真が掲載されている。
- (76) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』104～105頁。
- (77) 2015年2月22日調査。
- (78) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』37頁。
- (79) 註(4)前掲、和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』72～112頁など。
- (80) 猿投神社蔵。豊田史料叢書編集会編『豊田史料叢書』猿投神社中世史料(豊田市教育委員会 1991年)201～233頁に史料の写真と釈文が掲載されている。
- (81) 平尾は2014年1月18日調査、野依は同年5月5日調査。
- (82) 『紀伊続風土記』卷之47の伊都郡志賀荘志賀村の大隆寺の項に「中志賀村の東二町にあり、本尊不動明王古佛なり、寺の側に観音堂<方五間>あり、今當寺の本尊とす、甚古堂にて柱みな蟲はみたり、本尊観音又甚古佛なり、毎年正月十日此堂にて大松明を燃し鬼の面を著け鬼の装束したるものを追いて堂内を驅せ廻ることあり、遠近群湊す、名つけて鬼はしりといふ<筑前住吉社及所々にあり>」とある。
- (83) 註(58)前掲、花園村のあゆみ実行委員会編『花園村のあゆみ』41～50頁など。
- (84) 註(18)前掲、有田川町清水行政局保管コピー。
- (85) 『紀伊国名所図会』後篇之3の阿彌陀堂の項に「川津明神の境内にあり、堂内にて例年正



月六日夜、御田といふ雑樂あり、久野原・板尾など大かた似たれども、誦歌・曲節ともたがひに異なり」とある。

- (86) 衣装の入れられた箱の蓋の裏面に「嘉永六癸丑極月吉日／御田擣着物箱／板尾邑／所持」との、箱の側面に「御田擣衣類入／板尾村」との墨書銘がある。註(18)前掲、有田川町教育委員会編『国指定重要無形民俗文化財杉野原の御田映像記録解説書』198・199頁に写真が掲載されている。
- (87) 註(6)前掲、清水町誌編集委員会編『清水町誌』下550・551頁。
- (88) 2014年2月11日調査。
- (89) 財団法人和歌山県文化財センター編『重要文化財雨錫寺阿弥陀堂修理工事報告書』（雨錫寺 1998年）13・14頁。
- (90) 『紀伊国名所図会』後篇之3の「杉野原村阿彌陀堂にて例年正月七日御田跳をなして年豊を祈る図」には「裸苗押し」は描かれていないが、燃え盛る阿弥陀堂外陣の灯は見える。
- (91) 2019年2月11日調査。
- (92) 註(8)前掲、清水町文化財保護審議委員会編『清水町の民俗行事』63頁。
- (93) 『紀伊国名所図会』後篇之3の「久野原の村民前年正月十日より後に生まれたる小児を（中略）併に御田躍をなす図」。また、同書の岩倉神社の項目には「此日又御田といへる雑樂あり、一人は婿のさまをなして、一人は舅の趣を學び、二人荒田をうち返すより、かり収むるまでの眞似をなして、當年の豊熟を祈れり」とあり、岩倉神社祭礼と同日の行事ではあるが、岩倉神社での行事とはしていない。
- (94) 那智勝浦町史編さん委員会編『那智勝浦町史』下巻（那智勝浦町 1980年）667～672頁など。
- (95) 註(47)前掲、『御祭礼御田精録』。「大茂之亟」の「亟」は丞の誤記・誤写でおものじょうの意であろう。

#### 【付記】

本稿は「寺院・仏堂を守護する神の展開・変容についての総合的研究—アジア仏教史の視座から—」（日本学術振興会科学研究費 基盤研究（C） 2019～2021年度 課題番号19K00124 研究代表者脊古真哉、研究分担者黒田龍二・曾根原理・上島享・藤井由紀子）による共同研究の成果の一部である。

2013年以來のこの地域の調査に際しては、和歌山県伊都郡かつらぎ町・有田郡有田川町・海草郡紀美野町・奈良県吉野郡野迫川村の地元関係者の方々、役場・教育委員会の方々に変えお世話になった。記して感謝の意を表します。特に丹生都比売神社の御田の調査では同社宮司丹生晃市氏、有田川町の行事・仏堂の調査では同町教育委員会の川口修実氏、有田川町清水行政局保管の関係史料の調査では清水行政局長（当時）中野裕示郎氏、野迫川村の調査では同村教育長中迫喜昭氏、和歌山県立博物館に寄託・所蔵されている関係史料の調査では同館の大河内智之氏・坂本亮太氏にご高配いただいた。これらの方々に篤くお礼申しあげます。

